

浦江遺跡

第5次調査2

— 銀棺墓地区の内容確認調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第863集

2005年

福岡市教育委員会

浦江遺跡

第5次調査2

— 壱棺墓地区の内容確認調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第863集



北部九州における浦江遺跡の位置

2005

福岡市教育委員会



区画墓全景（南より）



区画墓全景（真上より）

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には数多くの歴史的な文化遺産がみられます。本書は、金武地区の農村振興総合整備統合補助事業とともに福岡市教育委員会が実施した浦江遺跡の甕棺墓地区の内容確認調査報告です。

浦江遺跡は、早良平野を貫流する室見川西岸の段丘上に位置しています。今回の調査では従来知られていなかった弥生時代中期の区画墓の様相が明らかとなりました。稻作が始まった弥生時代は、金属器の普及にともなって生産力が増大した技術革新の時代といわれています。当時の北部九州は、各平野に分布する集落が生産を支え、甕棺を用いた集団墓がつくられた時代と考えられてきました。

早良平野は、奴国を擁する福岡平野と伊都国に挟まれた位置関係にあります。平野内には博多湾岸の西新町・藤崎遺跡、内陸部の有田・飯倉遺跡、多数の青銅器の出土で知られる吉武高木をはじめ弥生時代の墓制を把握するうえで基礎となる遺跡が分布しています。

甕棺墓は、数十基や時には数百基が群となって検出される場合がほとんどですが、区画の溝で開まれた事例は、あまり多くありません。浦江の墓地をとりまく溝の土は甕棺墓全体を覆って墳丘の盛土を構成したと考えられます。古代の人々は、どのような思いを込めて溝や墳丘で墓を区画したのでしょうか。本書が平野内における集団墓の位置づけにとどまらず、北部九州の墓制を解明するうえで基礎資料となることを期待します。

近い将来、調査区周辺の景観は様変わりするでしょうが、この報告書によって祖先の営みのひとコマを知る栄となれば幸いです。

さいごになりましたが関係機関ならびに地域住民の方々のご理解・ご協力にこの場をかりてあつくお礼申し上げます。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　言

- 本書は福岡市西区大字金武字大塚における農村振興総合整備統合補助事業にともなって福岡市教育委員会が2001～2002年度に発掘調査を実施した浦江遺跡群第5次調査のうち区画をもつ甕棺墓群の確認調査の報告書である。
- 遺構の呼称は一部記号化し、甕棺墓→K、土坑→SKとした。
- 本書に使用した遺構実測図は、調査担当者のほか名取さつき、横溝　舞、坂田邦彦、西岡千絵、押方　梢があたった。遺物実測図は、整理担当者と横溝　舞があたった。
- 本書に使用した現場写真の撮影は調査担当者が行い、空中写真については空中写真企画に委託した。
- 本書に使用した標高は海拔高である。
- 本書に使用した方位はとくに断わらないかぎり北磁である。
- 本書の執筆は、調査担当者のほか、赤色顔料の分析を比佐陽一郎がおこなった。また今回の調査区に接する1991年11月の浦江遺跡第2次調査(9138)については吉武　学が執筆した。題字は柴田志乃による。編集は吉武・横溝の協力を得て常松がおこなった。
- 本書にかかるすべての遺物・記録類は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・公開される予定である。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
O 144	URA-5	500m ²	2002.01.10～2002.08.25
9138	URA-2	5m ²	1991.11.06

本文目次

- Iはじめ……………1
- II遺跡の立地と遺構の分布……………2
- III区画墓の調査について……………3
- IV甕棺墓・甕棺……………6
- V区画溝出土の遺物……………32
- VI浦江遺跡13号甕棺墓出土の赤色顔料について42
- VII浦江遺跡第2次調査の記録……………43
- VIIIまとめ……………46

図版目次

- 卷頭図版……………区画墓全景
図版1……………区画墓周辺調査区全景
図版2……………区画墓周辺調査区全景
図版3……………区画墓全景
図版4……………区画墓陸橋部・溝
図版5……………区画墓溝
図版6……………1・2・4・5号甕棺墓
図版7……………6・7・8・9号甕棺墓
図版8……………10・11・12・14号甕棺墓
図版9……………13号甕棺墓
図版10……………15・16・17・18号甕棺墓
図版11……………19・21・22・23号甕棺墓
図版12……………24・26号甕棺墓、6・11号甕棺
図版13……………2・13号甕棺
図版14……………10・20・21号甕棺
図版15……………9・16・19号甕棺
図版16……………1・8・18・23・24号甕棺
図版17……………4・5・7・17号甕棺
図版18……………区画溝出土の土器

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成10(1998)年、福岡市農林水産局より教育委員会埋蔵文化財課に、西区金武地区における集落基盤整備事業の実施に関わる埋蔵文化財の確認について事前の問合せがあった。これを受け、同課は、当該地域の埋蔵文化財の有無及び遺構の遺存状態確認のため、平成11年度から隨時試掘調査を実施した。

本書所収の浦江遺跡は、試掘調査によって濃密な遺構の広がりが確認され、計画によって削平をうける箇所や取付道路など構造物が予定されている部分について発掘調査が必要と判断された。平成13(2001)年11月末から調査の条件整備をすすめ、翌1月から浦江遺跡の発掘調査を開始した。

2. 区画墓の調査

浦江遺跡の甕棺墓群は、平成3(1991)年9月14日に九州地方を直撃した台風17号により崖面が崩落し、現地踏査によって甕棺墓2基が認められた。緊急に甕棺墓を探り上げる必要性が生じ、11月6日に、写真撮影、遺構実測および周辺地形の測量をおこなった。この調査の結果、これら2基以外にも甕棺墓の分布が確認された。当時の調査地点は、浦江B遺跡群とよばれていたが、のちに浦江遺跡として統合された。

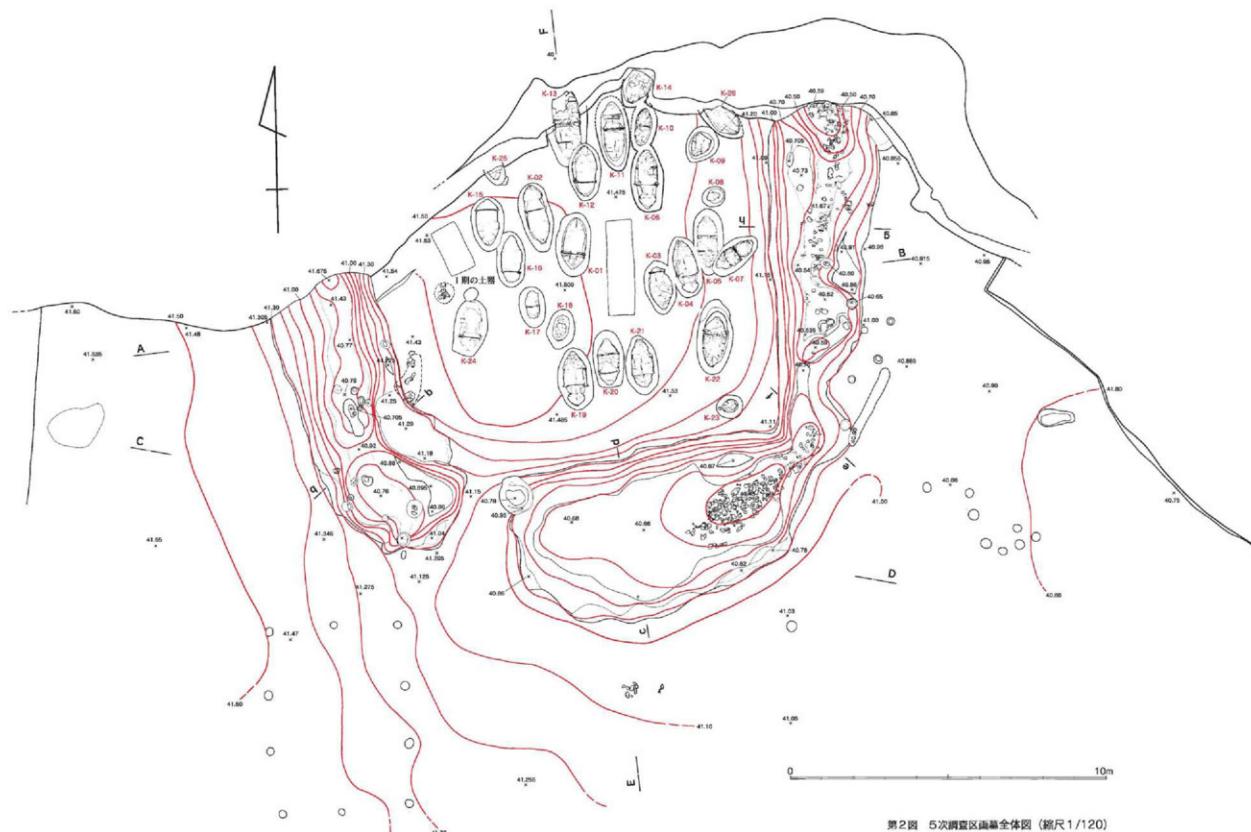
平成13(2001)年度の調査区は、設計上は大幅な削平をうける箇所ではなかったが、耕作土の直下で甕棺墓がつぎつぎと確認されたため、遺構の保存については工事による影響が懸念された。しかも甕棺墓の分布域は崖面に向かってほぼ矩形を呈した500m²の範囲に集中していたため、区画をもつ甕棺墓として学術的な重要性が高まった。そこで表土を重機で除去し、遺構検出および掘り下げを人力で行った。検出された主要遺構は、弥生時代中期を主体とする甕棺墓とその墓域を区画する溝である。個別の遺構写真は、調査担当者が撮影し、周辺地域を含めた全景については気球による空中写真撮影を委託した。遺構実測は、各調査員が手測で行った。調査期間は平成14年1月10日～8月25日にかけてである。

3. 調査整理体制

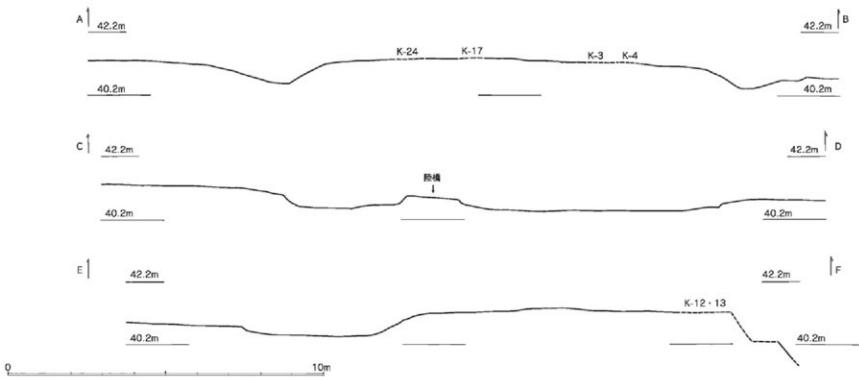
関係者各位の協力を得て、下記の調査体制のもとで、本調査は遂行された。発掘調査ならびに整理作業・報告書作成にあたっては国庫補助をうけて実施した。

調査主体	福岡市教育委員会埋蔵文化財課
教育長	生田征生・植木とみ子
文化財部長	柳田純孝(13年度)・堺 徹(14・15年度)・山崎純男
文化財整備課長	上村忠明・平原義行(14～15年度)・榎本芳治
管理係長	市坪敏郎 管理係 御手洗 清・後藤泰子
埋蔵文化財課長	山崎純男(前任)・山口譲治
調査第1係長	山口譲治(13年度)・力武卓治(14・15年度)・田中壽夫
調査担当	米倉秀紀・吉留秀敏・藏富士 寛・常松幹雄
整理担当	常松幹雄
調査員	名取さつき・境 智子・横溝 舞(西南学院大学)、 坂田邦彦 押方 梢 西岡千絵(福岡大学)
資料整理	池田由美 渡辺敦子 柴田志乃 岩隈香歌里 宮崎まり子 城後 渡

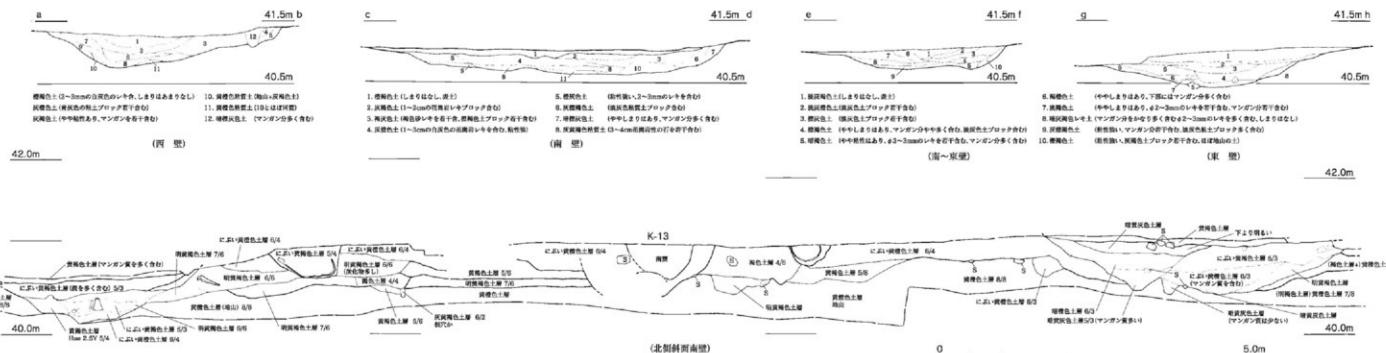
調査中は、大きな災害や事故にみまわれることなく調査を遂行することができた。関係機関ならびに調査関係者各位に謝意を表したい。



第2図 5次調査区面積全体図 (縮尺1/120)



第3図 区画面エレベーション (縮尺1/120)



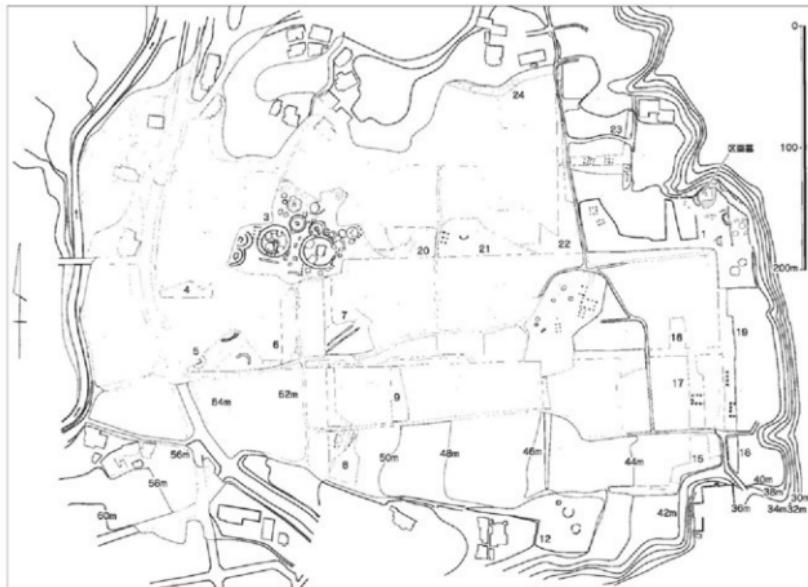
第4図 区画面の土層断面図 (縮尺1/60)

II 遺跡の立地と遺構の分布(第1図)

浦江遺跡は、福岡市の西部、早良平野の南西部に位置する。早良平野は東西6km、奥行き8kmの扇状地形で、その中央には室見川が貫流している。壇棺墓地区は、扇状地形の基部、室見川中流域西岸の標高40mあまりの段丘上に立地する。川岸との比高差は10m程度である。すぐ南側は、油山から派生する荒平山と高祖山から派生する西山に挟まれた幅500m程度に狭まる地形となっている。

今回報告する墓群は、区画溝に囲まれ盛土を有する構造から壇丘区画墓内に構成された集団墓である。ここでは区画墓と総称する。区画墓の北側は、谷が深く切り込んでおり、現在も浸食は進行している。谷の浸食がいつ始まったかは分からぬが、墓地の造営が始まった段階では、谷の開析は見られなかつたと考えるのが自然であろう。区画墓の南側には弥生中期段階の集落が立地しており、時期的に墓地が營まれた期間と重複する。また西側には前期末段階の壇棺墓3基の分布が確認できたが、何れも擾乱を受けて原位置をとどめていない。

この狭長な早良平野は、湾岸部から内陆部にかけて都市開発や区画整理、圃場整備、宅地開発というようにほぼ全域にわたって埋蔵文化財の調査が行われてきた。北部九州でも集団墓の分布や青銅武器など、宝器類に関するデータが蓄積された有数のエリアである。いま個々の概要についてあげる事はできないが、周辺の平野を含めた浦江遺跡の区画墓の包括的な評価については、結語で総括する。



第1図 浦江遺跡5次調査全体図 (1/4,000)

III 区画墓の調査について

区画墓の構造(第2・3・4図)

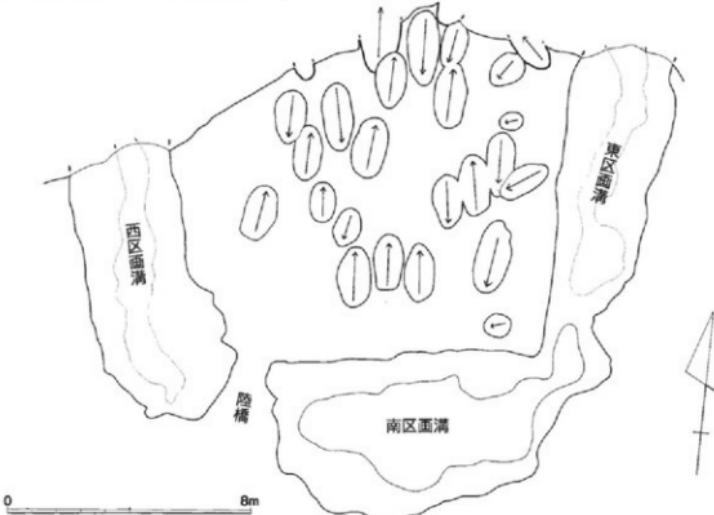
甕棺墓の墓域は、北側を崖面で崩落をうけているが東西幅13.0mの矩形の範囲内に限定される。分布域の周囲は南西の一部を除いて区画の溝で囲まれている。溝は、墓域の南東隅をみると南辺と東辺に沿って掘削された個々の土坑のつながりであり、本来は矩形の各辺にそって東西南北の各辺に沿って掘削された土坑がつながった結果である。

区画墓外周の南西部にある掘削を受けていない箇所は、陸橋としての機能をもつもので、ほとんどの甕棺墓の主軸が陸橋の方向性と同じ南北方向で重なる点は注目すべきである。陸橋の横断面は、逆台形で、東側を時期不明の楕円形の土坑で切られるが、区画墓に接する部分で幅約2.0m、南北方向に50cmほど拡幅している。陸橋に接続する区画墓の南西隅は、墓群の空白地帯となっている。このスペースは、葬送儀礼や墓前祭礼など状況に応じて機能した空間と理解できる。

陸橋をはさんで西側を西区画溝、東側を南区画溝とする。南溝と接する区画墓の東辺に沿って掘削された部分を東区画溝とする。

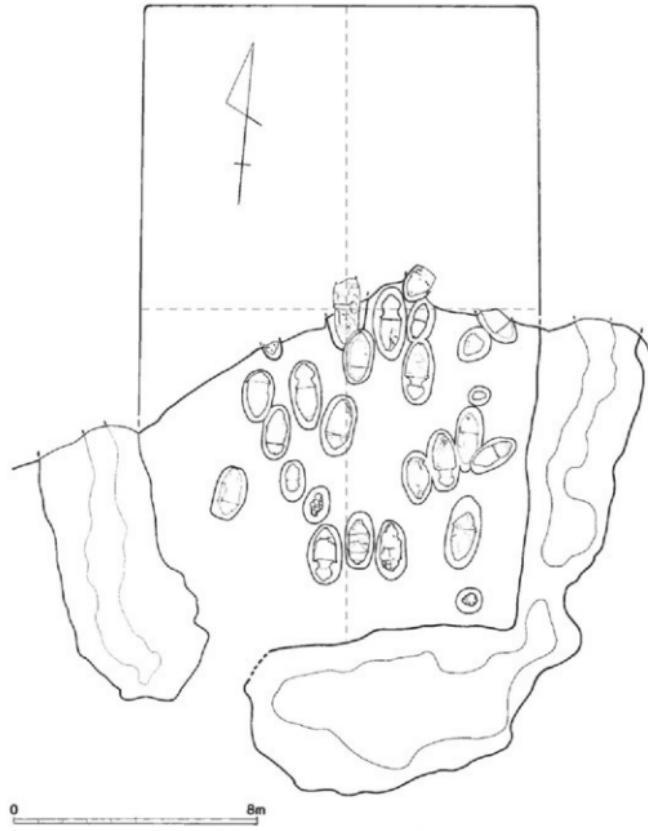
区画墓内の10cm単位の等高線は、41.0mから5本のコンターラインが回り41.5mが最も高い。区画墓を回る土坑は30~40cm程度の深さで、南と東の区画溝では弥生土器が集中して検出された。

矩形の範囲内は削平を受けているが北側の崖面の土層観察によって、地山に弥生中期初頭の文化層が重なり、さらにその上に盛土の堆積を確認することができた。区画墓の西北に設定したテストピット、西トレンチの南で弥生中期初頭にあたる城ノ越式（I期）の甕と壺が検出された（第2図）。さらに区画溝の出土遺物には、前期末から中期初頭段階の土器の底部破片が混入していることから、該期の集落が営まれていたと推定される。



第5図 甕棺の挿入方向からみた墓群の構成 (1/160)

甕棺は、K-13やK-12のように墓坑の底のレベルが40.5m程度のものは掘削を受けていない。言いかえると、墓坑の底のレベルが41m程度をはかる場合は甕棺の上面から半分程度まで掘削を受けている。土圧による甕棺の陥没を考慮すると墓坑の上面のレベルにあたる本来の墳丘は、少なくとも42m以上の高さで構築されなければならないことになる。したがって墓坑の底のレベルが41m程度の墓坑をもつ甕棺墓は、区画墓の墳丘を掘り込んで埋置されたと考えられる。墳丘には周囲を掘削した土が供給されたとみなされるので、外周の溝は、墓域と周囲を画するだけでなく、区画墓をモニュメンタルな構築物として演出する役割も担っていたであろう。



第6図 区画墓の復元想定図 (1/160)

墓群の構成（第5図）

5次調査で検出された甕棺墓は、26基にのぼる。これにVI章の2次調査で検出された甕棺墓を加えると28基となる。棺内からは副葬遺物や装身具、武器の先端部などの遺物は、一切出土しておらず、13号甕棺墓で水銀朱が検出されたのが伴出遺物についての唯一の所見である。

26基の甕棺墓は、中央のトレンチをはさんで東西南北の4群に大別することができる。K-7・8・23・26の4基の甕棺墓以外はほぼ南北方向に主軸をとる点に特徴がある。この主軸方向は、先述したように西と南の区画溝にはさまれた陸橋部の方向とはほぼ一致している。合せ口甕棺の下壘の挿入方向を矢印で示すと南北二つに2分される。人骨は遺存していないかったが⁴、甕棺の挿入方向を考慮すると被葬者の頭位方向について統一は図られていない。だがこの状況は、甕棺の挿入方向がランダムだったことを示しているわけではない。今明らかになっていない被葬者に関する情報と必然的な関連性を模索すべきである。

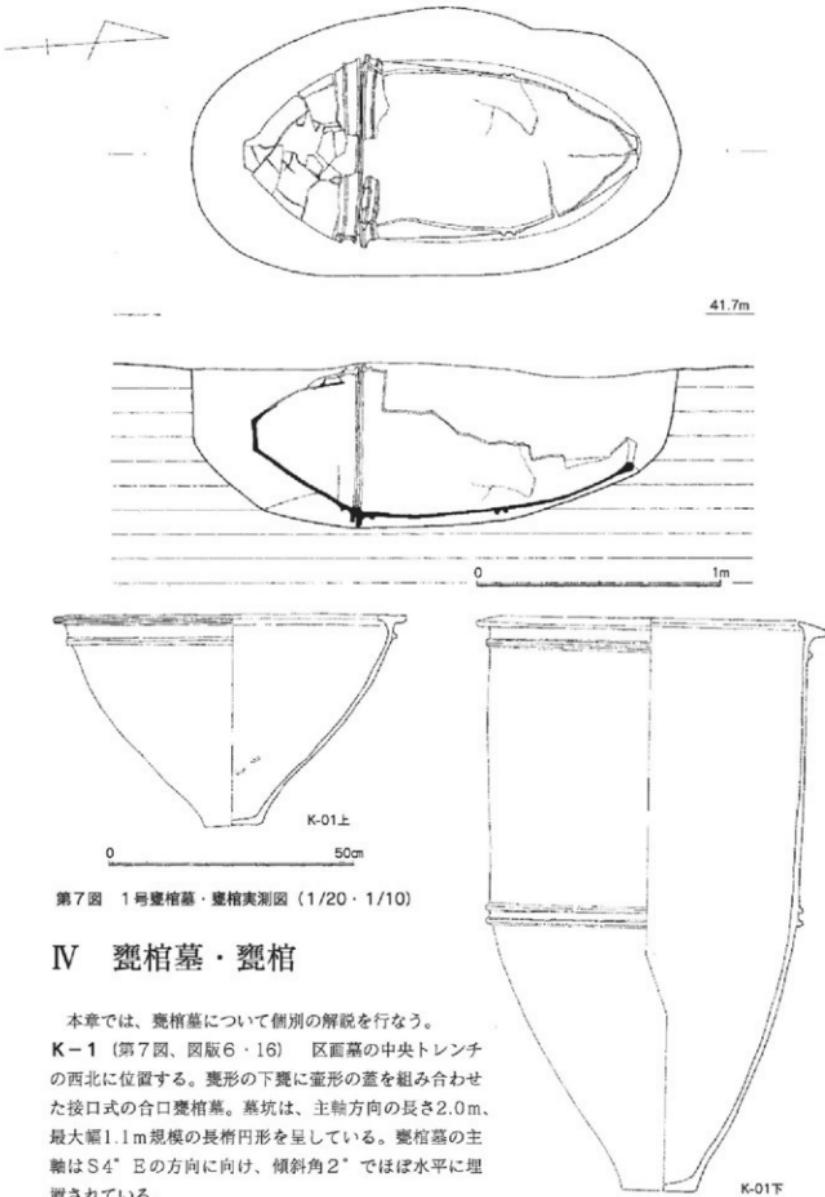
各甕棺墓の掘り方のプランは不明瞭で、甕棺の検出を契機として墓坑のプランを確認したものがほとんどである。同型式の甕棺は、墓坑は切りあっても、甕棺本体は切り合っていない。墓坑上の土體頭状の高まりが⁵、墓の存否を示す一種の標識となっていたと推定される。

区画墓の復元（第6図）

次に区画墓の本来の規模について考えてみたい。北側の谷の解析が始まった時期は明らかでないが、少なくとも区画墓が築造された段階は、北側に緩斜面が広がる程度だったであろう。

墓群は、中期中頃から後葉の時期の甕棺で占められており、型式としては須玖式から立岩式に相当する。このなかで大型の甕を組合せたものは、K-13のみで墓群中、最大の規模である。K-13は、須玖式の範囲で捉えられるが、須玖式のK-12によって墓坑を切られている。K-13下壘の断面三角形の突帯や内側にせり出す口縁部は、須玖式でも古相を呈するタイプとできよう。K-13の主軸方向は区画の東辺とほぼ平行で、南辺と垂直な位置関係にあることから、区画墓の中心的な位置にあることを示している。

区画墓の平面プランは、K-13の埋葬を契機として企画されたと想定すると甕の接口部を中心として南東隅の区画を北側に反転し、さらにK-13の中軸にそって反転した範囲を本来の区画内と想定したい。復元した区画の規模は東西13.0m、南北21.0mで総面積は273m²となる。区画内の甕棺墓は、本来50基を上回る構成と想定される。

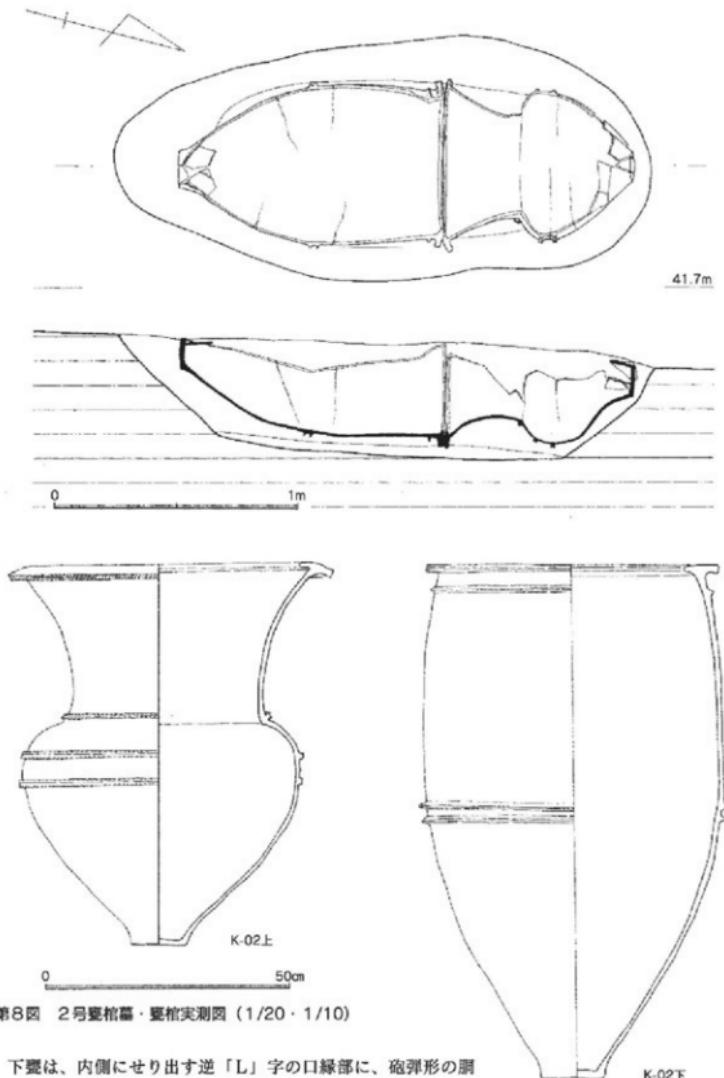


第7図 1号甕棺墓・甕棺実測図 (1/20・1/10)

IV 甕棺墓・甕棺

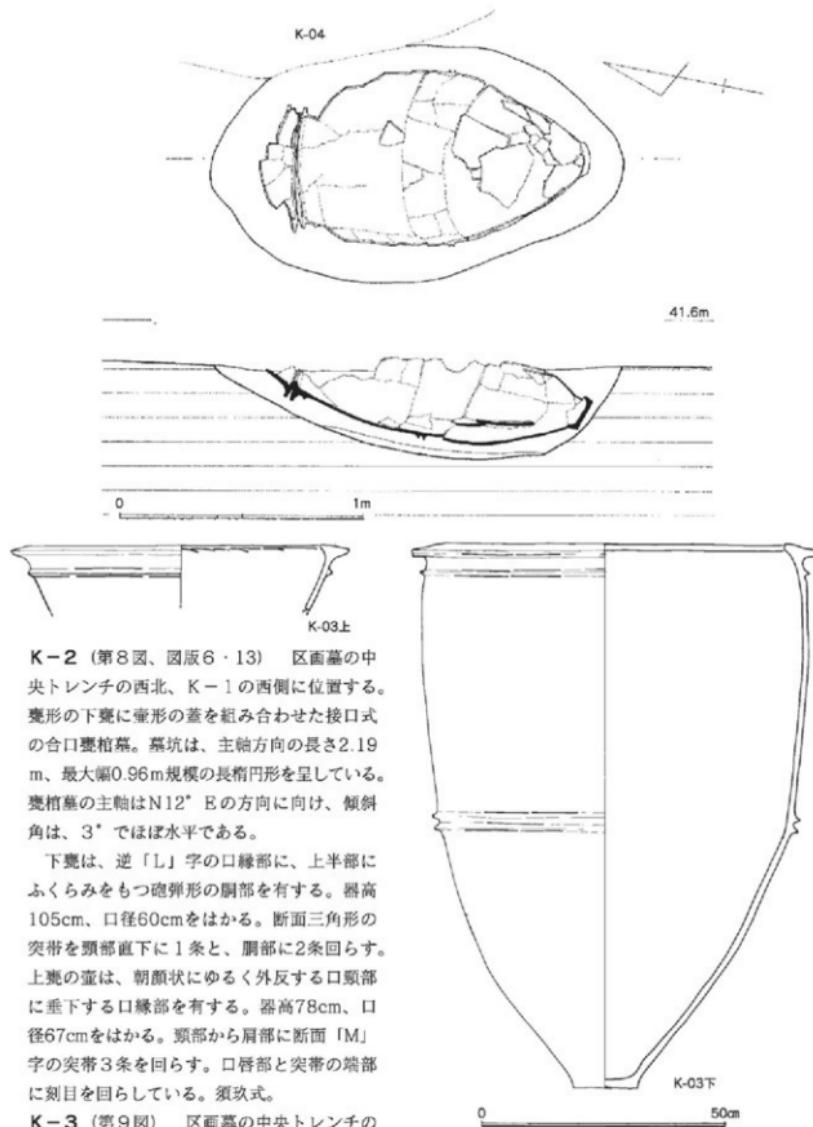
本章では、甕棺墓について個別の解説を行なう。

K-1 (第7図、図版6・16) 区画墓の中央レンチの西北に位置する。甕形の下甕に壺形の蓋を組み合わせた接口式の合口甕棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ2.0m、最大幅1.1m規模の長梢円形を呈している。甕棺墓の主軸はS4°Eの方向に向け、傾斜角2°でほぼ水平に埋置されている。



第8図 2号要棺墓・要棺実測図 (1/20・1/10)

下蓋は、内側にせり出す逆「L」字の口縁部に、砲弾形の調部を有する。器高117cm、口径72cmをはかる。頸部直下に逆台形の突帯を1条と、胴部に2条を回らす。上蓋の鉢は、逆「L」字の口縁部は、内側にせり出し、その直下に断面三角形の突帯を回らしている。器高43cm、口径72cmをはかる。須玖式。

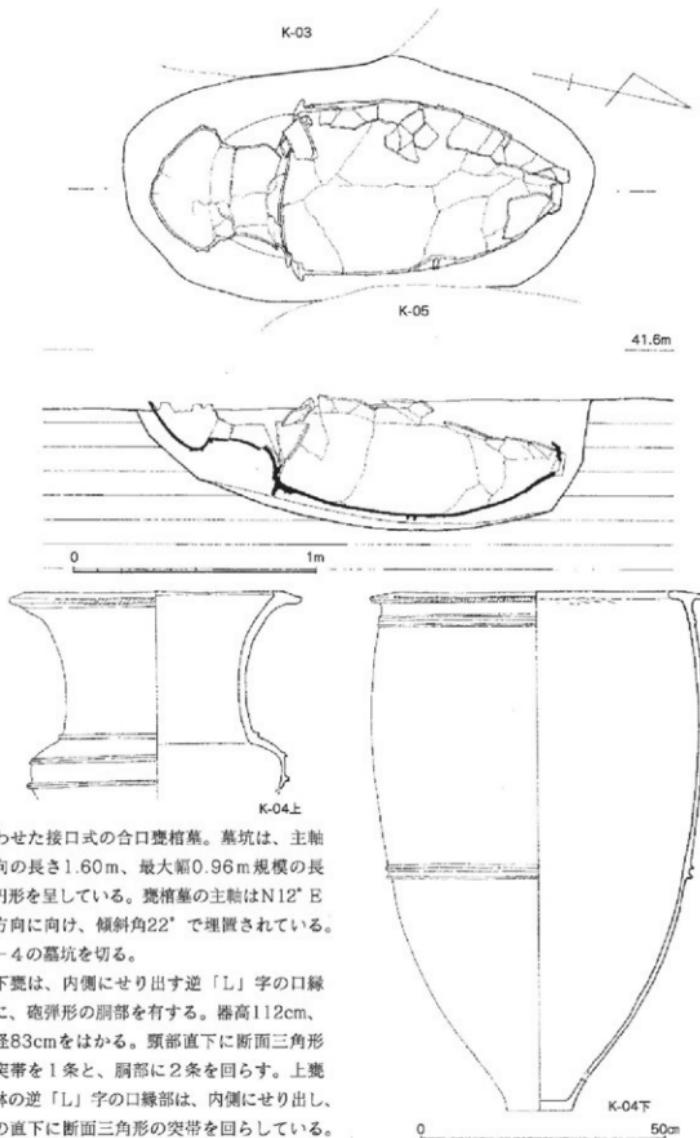


K-2 (第8図、図版6・13) 区画墓の中央トレンチの西北、K-1の西側に位置する。菱形の下蓋に壇形の蓋を組み合わせた接口式の合口要棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ2.19m、最大幅0.96m規模の長楕円形を呈している。要棺墓の主軸はN12°Eの方向に向け、傾斜角は、3°でほぼ水平である。

下蓋は、逆「L」字の口縁部に、上半部にふくらみをもつ砲弾形の脛部を有する。器高105cm、口径60cmをはかる。断面三角形の突帯を頭部直下に1条と、脛部に2条回らす。上蓋の蓋は、朝顔状にゆるく外反する口縁部に垂下する口縁部を有する。器高78cm、口径67cmをはかる。頭部から肩部に断面「M」字の突帯3条を回らす。口唇部と突帯の端部に刻目を回らしている。須玖式。

K-3 (第9図) 区画墓の中央トレンチの東に位置する。菱形の下蓋に鉢形の蓋を組み

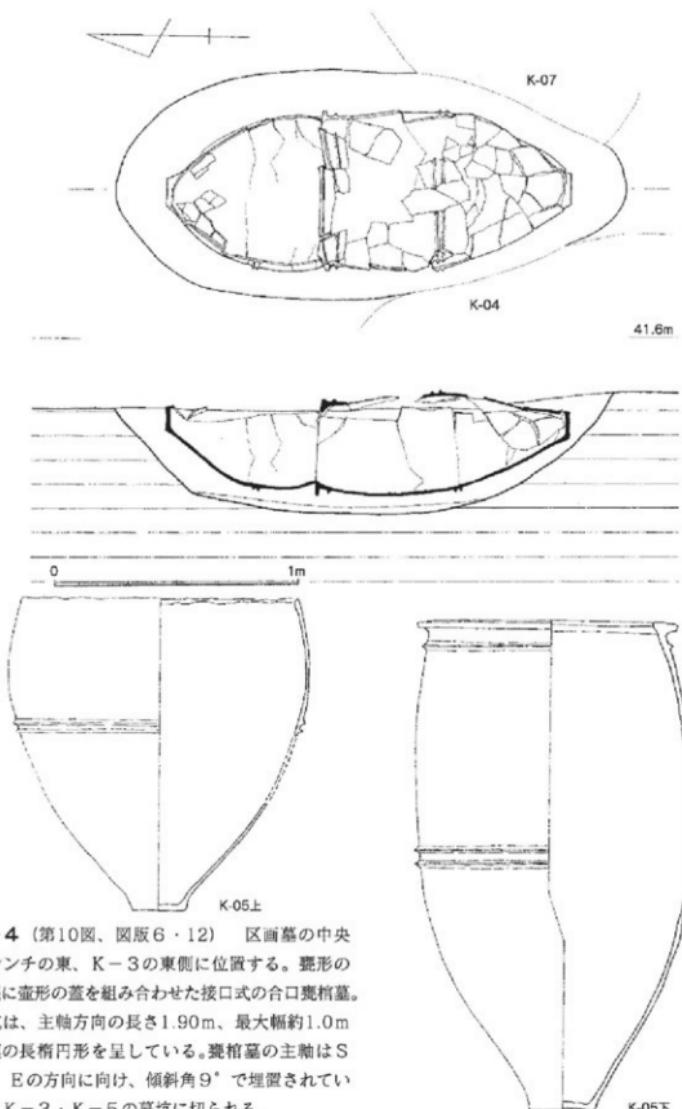
第9図 3号要棺墓・要棺実測図 (1/20・1/10)



合わせた接口式の合口壺柏墓。墓坑は、主軸方向の長さ1.60m、最大幅0.96m規模の長楕円形を呈している。壺柏墓の主軸はN12°Eの方向に向け、傾斜角22°で埋置されている。K-4の墓坑を切る。

下壺は、内側にせり出す逆「L」字の口縁部に、砲弾形の洞部を有する。器高112cm、口径83cmをはかる。頸部直下に断面三角形の突帯を1条と、肩部に2条を回らす。上壺の鉢の逆「L」字の口縁部は、内側にせり出し、その直下に断面三角形の突帯を回らしている。口径69cmをはかる。須玖式。

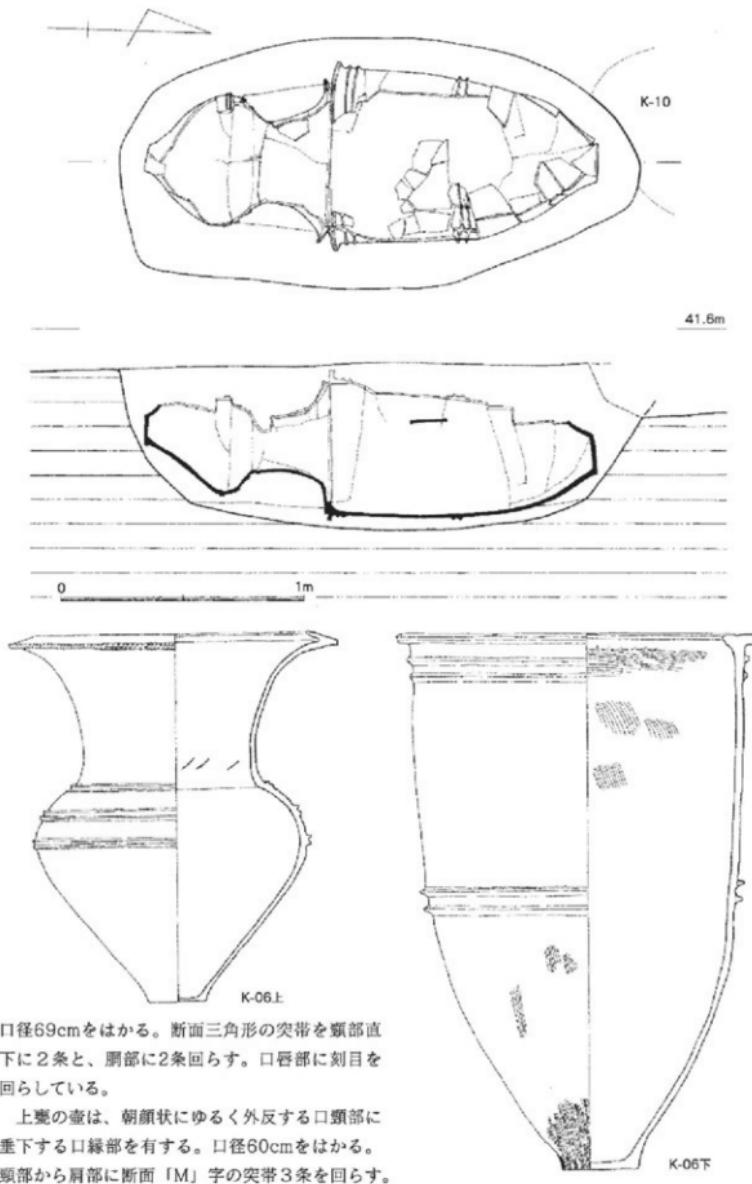
第10図 4号壺柏墓・壺柏実測図 (1/20・1/10)



K-4 (第10図、図版6・12) 区画墓の中央
トレチの東、K-3の東側に位置する。壺形の
下窓に壺形の蓋を組み合わせた接口式の合口壺棺墓。
墓坑は、主軸方向の長さ1.90m、最大幅約1.0m
規模の長楕円形を呈している。壺棺墓の主軸はS
12° Eの方向に向け、傾斜角9°で埋置されてい
る。K-3・K-5の墓坑に切られる。

下窓は、逆「L」字の口縁部に、上半部にふく

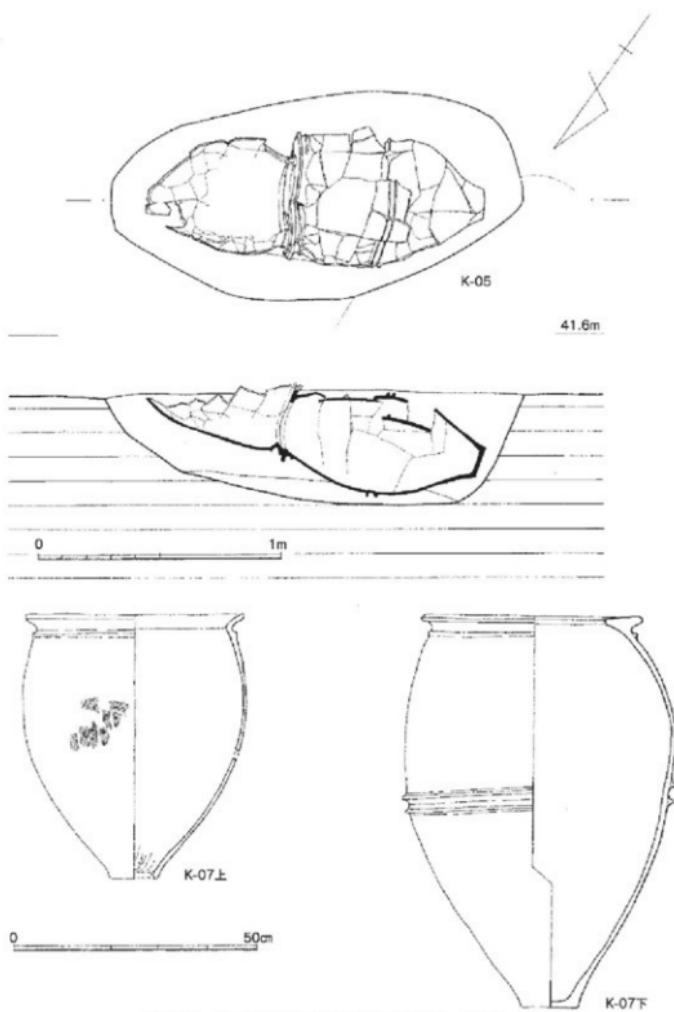
らみをもつ壺形の脛部を有する。器高106cm、 第11図 5号壺棺墓・壺棺実測図 (1/20・1/10)



口径69cmをはかる。断面三角形の突帯を頸部直下に2条と、胴部に2条回らす。口唇部に刻目を回らしている。

上蓋の壺は、朝顔状にゆるく外反する口頸部に垂下する口縁部を有する。口径60cmをはかる。頸部から肩部に断面「M」字の突帯3条を回らす。口唇部に刻目を回らしている。須玖式。

第12図 6号壺棺墓・壺棺実測図 (1/20・1/10)



第13図 7号壺棺墓・壺棺実測図 (1/20・1/10)

K-5 (第11図、図版6・17) 区画墓の中央トレンチの東、K-4の東側に位置する。壺形の下壺に壺を打ち欠いた蓋を組み合わせた合口壺棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ1.90m、最大幅約0.95m規模の長楕円形を呈している。壺棺墓は、主軸を磁北に向け、傾斜角は、ほぼ水平に埋置されている。K-4の墓坑を切り、K-7の墓坑に切られる。

下壺は、逆「L」字の口縁部を有し、断面三角形の突帯を頸部直下に2条と、肩部に2条回らす。

器高100cm、口径47cmをはかる。上甕は胴部上半を打ち欠き、胴部に断面三角形の突帯2条を回らす。現存高64cm、胴部最大径61cmをはかる。須玖式。

K-6 (第12図、図版7・17) 区画墓の中央トレンチの北東に位置する。甕形の下甕に壺形の蓋を組み合わせた接口式の合口甕棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ2.13m、最大幅約1.03m規模の長楕円形を呈している。甕棺墓は主軸を南に向かって傾斜角4°で埋置されている。K-10の墓坑に切られる。

下甕は、逆「L」字の口縁部に、砲弾形の肩部を有する。器高110cm、口径73cmをはかる。断面三角形の突帯を頸部に2条と、胴部に2条回らす。外底部および内面にハケ目調整痕がみられる。

上甕の壺は、朝顔状にゆるく外反する口頸部に内側に反転する口縁部を有する。器高75cm、口径67cmをはかる。頸部から肩部に断面「M」字の突帯3条を回らす。口唇部に刻目を回らす。須玖式。

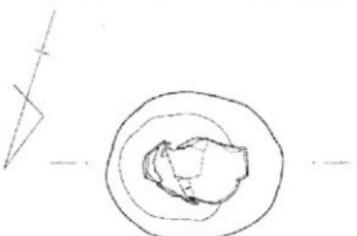
K-7 (第13図、図版7・17) 区画墓の中央トレンチの東、区画の東辺に位置する。甕形の下甕に甕形の蓋を組み合わせた接口式の合口甕棺墓。

下甕は、大型棺とするにはやや小型で、北筑後の横限狐塚遺跡の分類にしたがえば器高68cmで中型棺に相当する(速水1985)。墓坑は、主軸方向の長さ2.19m、最大幅0.96m規模の長楕円形を呈している。甕棺墓は主軸をN55°Eの方向に向かって傾斜角は、17°で埋置されている。

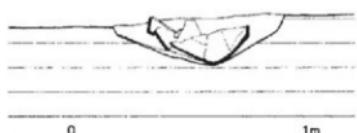
下甕は、内側にせり出す断面逆「L」字の平坦な口縁部を有し、上半部に丸みをおびたの肩部を有する。頸部に断面三角形の突帯1条と、胴部に2条回らす。器高80cm、口径45cmをはかる中型の器種である。上甕は、断面「く」字の口縁部を有し、肩部に断面三角形の突帯を回らす。器高54cm、口径45cmをはかる。外面はハケ目の調整痕をとどめる。立岩式。

K-8 (第14図、図版7・16) 区画墓の東辺、K-3の北側に位置する。樽形土器と壺形土器の上部を打ち欠いた底部を組み合わせた土器棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ0.70m、最大幅0.60m規模の楕円形を呈している。削平が著しく原位置を保っているかどうか疑わしいが、土器は主軸をN73°Eの方向に向けて埋置されていた。

上甕とした土器は、壺の口縁から肩部までを打ち欠いた底部付近の破片である。現存高18cm、底径11cmをはかる。樽形土器は、丹塗りで断面三角



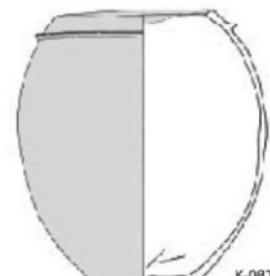
41.6m



0 1m



K-8上



K-8下

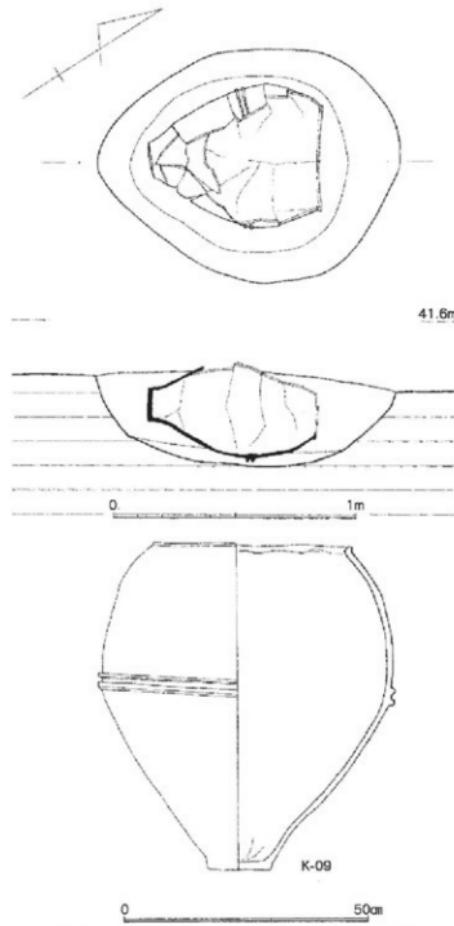
0 20cm

第14図 8号甕棺墓・甕棺実測図 (1/20・1/6)

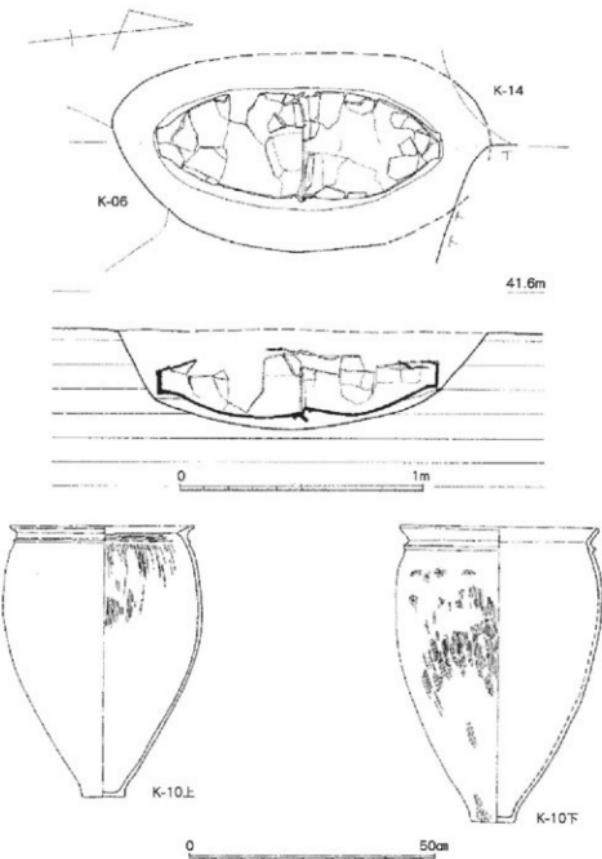
形の突帯を回らす。器高33cm、口径19cm、胴部最大径30.5cmをはかる。須玖II式。

K-9 (第15図、図版7・15) 区画墓の中央トレンチの北東、区画墓の東辺に位置する。口縁部を打ち欠いた壺形土器を用いた单棺墓。口縁部に木蓋の痕跡を示すくぼみは確認できなかった。墓坑は、主軸方向の長さ1.25m、最大幅約0.95m規模の梢円形を呈している。壺棺墓は主軸をN33°Eの方向に向け、口縁部方向に若干傾斜して埋置されている。

壺棺は、上半部に丸みをおびたの胴部を有する。胴部に断面逆台形の突帯2条を回らす。現存高68cm、胴部最大径60cmをはかる中型の器種である。立岩式。



第15図 9号壺棺墓・壺棺実測図 (1/20・1/10)

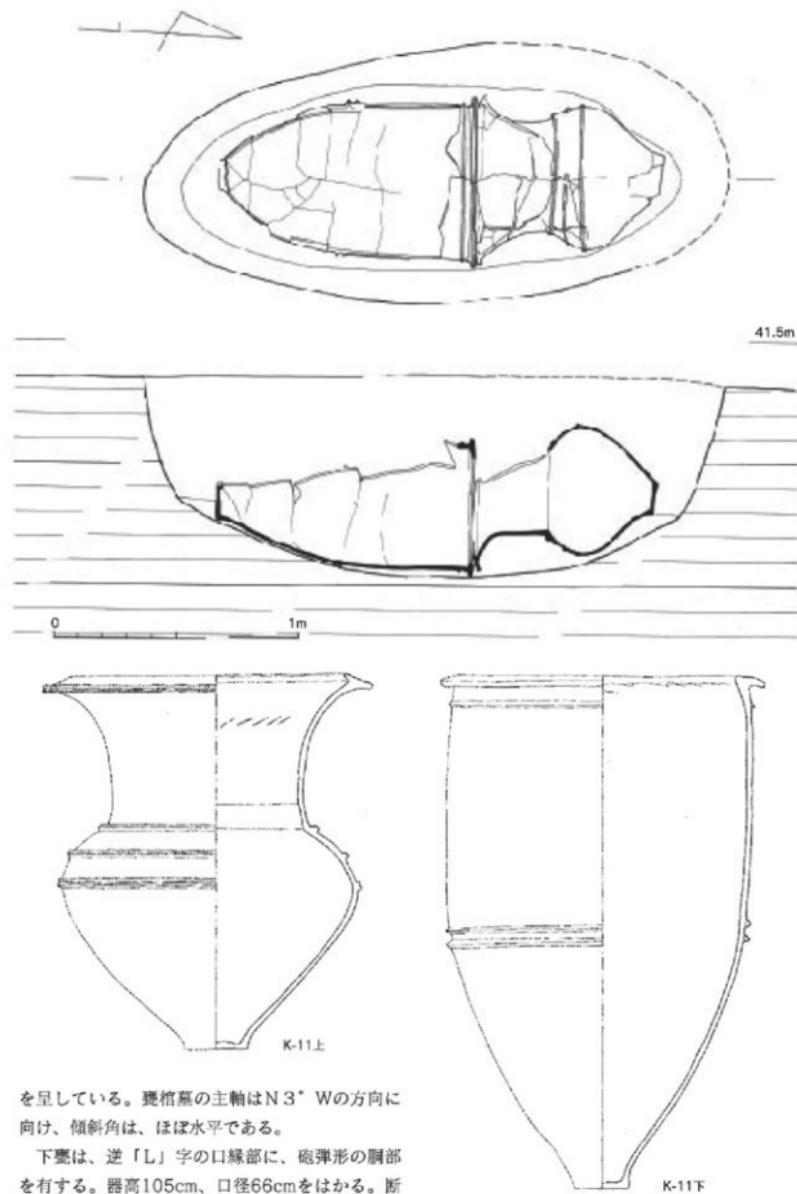


第16図 10号窓棺墓・窓棺実測図 (1/20・1/10)

K-10 (第16図、図版8・14) 区画墓北側の崖面近くに位置する。ふたつの甕を組み合わせた接口式の合口窓棺墓。サイズが大きめの南側の甕を下甕とする。墓坑は、主軸方向の長さ1.53m、最大幅約0.82m規模の長楕円形を呈している。窓棺墓は主軸をN 7° Wに向け、傾斜角2°でほぼ水平に埋置されている。K-6の墓坑を切る。

下甕は、断面「く」字の口縁部を有し、頸部に断面三角形の突帯を回らす。器高60cm、口径40cmをはかる。外面にハケ目の調整痕をとどめる。上甕は、断面「く」字の口縁部を有し、肩部に断面三角形の突帯を回らす。器高55cm、口径38cmをはかる。内面にハケ目の調整痕をとどめる。立岩式。

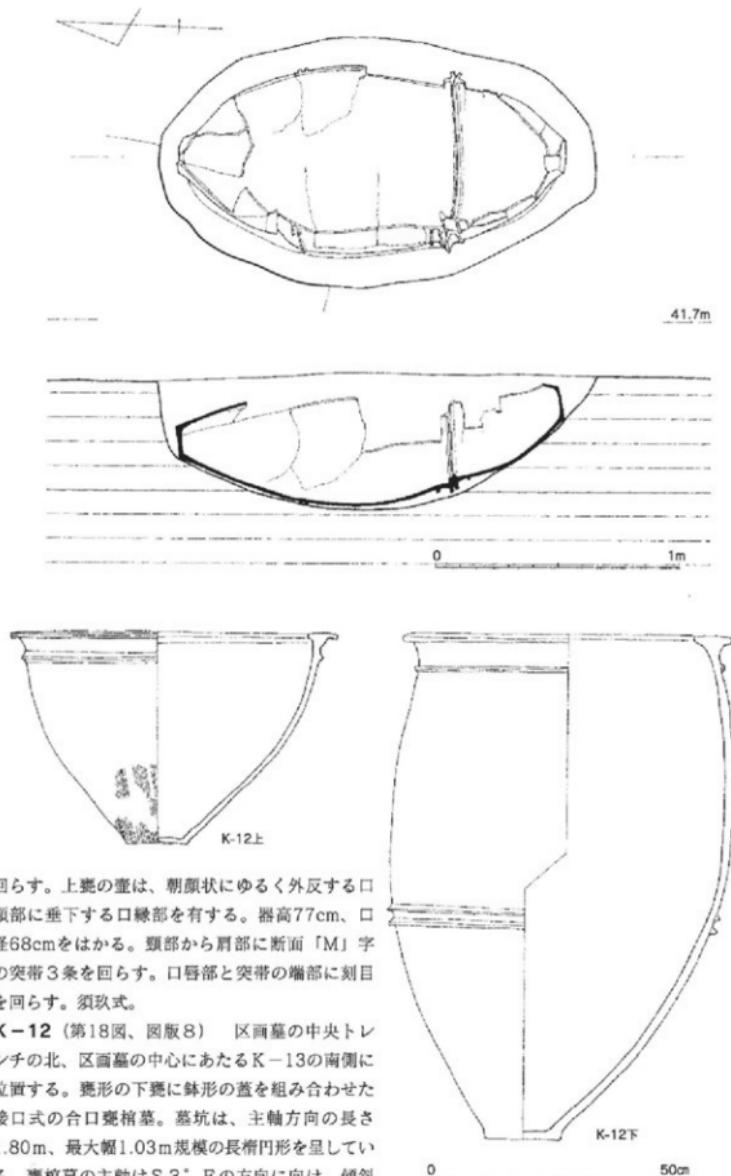
K-11 (第17図、図版8・12) 区画墓の中央トレーニチの北に位置する。甕形の下甕に甕形の蓋を組み合わせた接口式の合口窓棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ2.04m、最大幅1.06m規模の長楕円形



を呈している。槨棺墓の主軸はN 3° W の方向に
向け、傾斜角は、ほぼ水平である。

下図は、逆「L」字の口縁部に、砲弾形の肩部
を有する。器高105cm、口径66cmをはかる。断
面三角形の突帯を頸部直下に1条と、胸部に2条

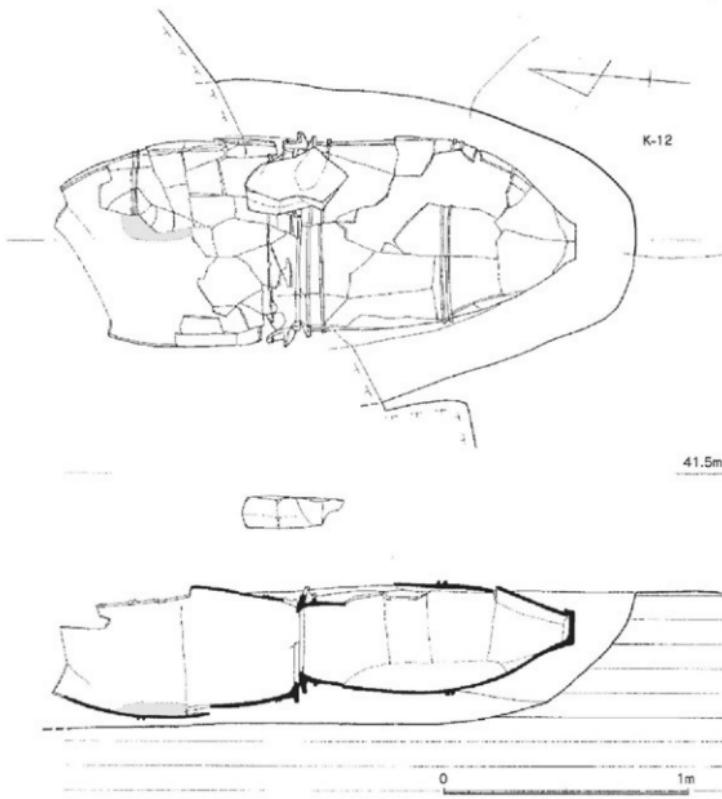
第17図 11号墳墓・槨棺実測図 (1/20・1/10)



回らす。上甕の壺は、朝顔状にゆるく外反する口
頸部に垂下する口縁部を有する。器高77cm、口
径68cmをはかる。頸部から肩部に断面「M」字
の突帯3条を回らす。口唇部と突帯の端部に刻目
を回らす。須次式。

K-12 (第18図、図版8) 区画墓の中央トレ
ンチの北、区画墓の中心にあたるK-13の南側に
位置する。菱形の下甕に鉢形の蓋を組み合わせた
接口式の合口甕棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ
1.80m、最大幅1.03m規模の長楕円形を呈してい
る。甕棺墓の主軸はS 3° E の方向に向け、傾斜

第18図 12号甕棺墓・甕棺実測図 (1/20・1/10)



第19図 13号壇棺墓実測図 (1/20)

角6°で埋置されている。

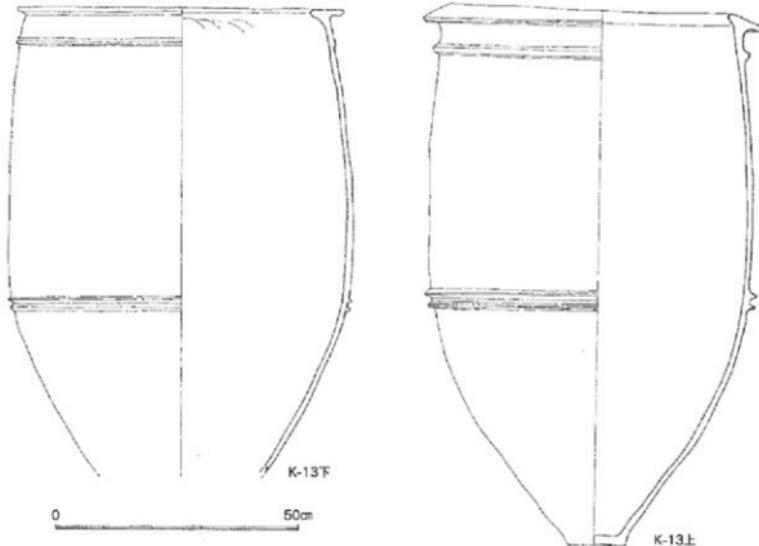
下甕は、「T」字の口縁部に、上半部にふくらみをもつ砲弾形の胴部を有する。器高104cm、口径68cmをはかる。断面「M」字形の突帯を頸部直下に1条と、胴部に断面三角形の突帯2条を回らす。上甕の鉢は、逆「L」字の口縁部は、内側に突出し、その直下に断面三角形の突帯を回らしている。器高43cm、口径67cmをはかる。底部付近にハケ目をのこす。須玖式。

K-13 (第19・20図、図版9・13) 区画墓の中央トレンチの北、区画墓の中心に位置する。壇形の器種を組み合わせた接口式の合口壇棺墓。墓坑は、主軸方向の北端を崖面で削平されている。最大幅は、推定復元で1.35mをはかり、区画墓内で最も規模が大きい。壇棺墓の主軸はS 5° Wの方

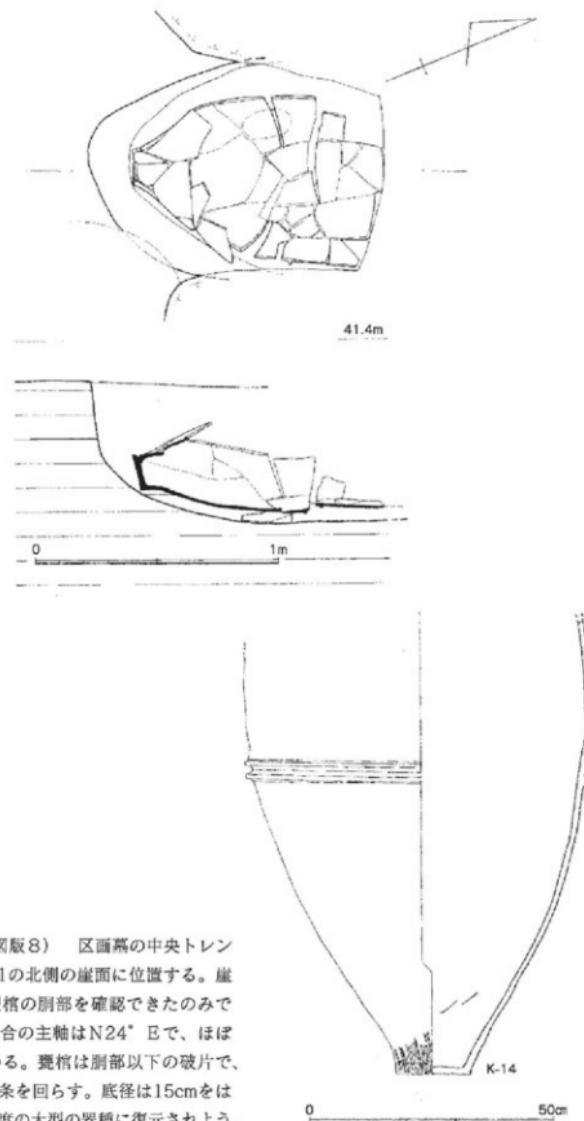
向に向け、ほぼ水平に埋置されている。大型の壺形土器を組み合わせた例は、本区画墓で唯一である。接口部の上約25cmに配された長軸40cm程度の扁平な花崗岩は、標石の可能性がある。

下壺は、内側にせり出寸口縁部に、下半部にふくらみをもつ砲弾形の胴部を有する。底部を欠くが現状で器高95cm、口径67cmをはかる。本来の器高は、110cmを超えるであろう。断面「M」字形の突帯を頸部直下に1条と、胸部に断面三角形の突帯2条を回らす。下壺のアミかけの範囲を中心に赤色顔料(水銀朱)が検出された。詳細については42頁の比佐氏の分析結果を参照していただきたい。上壺は、外傾する口縁部は、内側にせり出し、その直下に断面逆台形の突帯を回らしている。器高109cm、口径69cmをはかる。胴部に断面三角形の突帯2条を回らす。須玖式。

K-13は、型式的には上壺が古相を呈しているが、何れも須玖式の範疇で捉えられるもので他の壺棺と比較して突出して遅るものではない。北側の崖の崩落部にかかっているとはいえ区画墓の東西幅の中央にあたり、大型の壺2個体を組み合わせた唯一の墓地構造である。このほか標石をもつ点や棺内から水銀朱が検出されたことから、被葬者が墓群の中心的な存在である可能性はたかい。



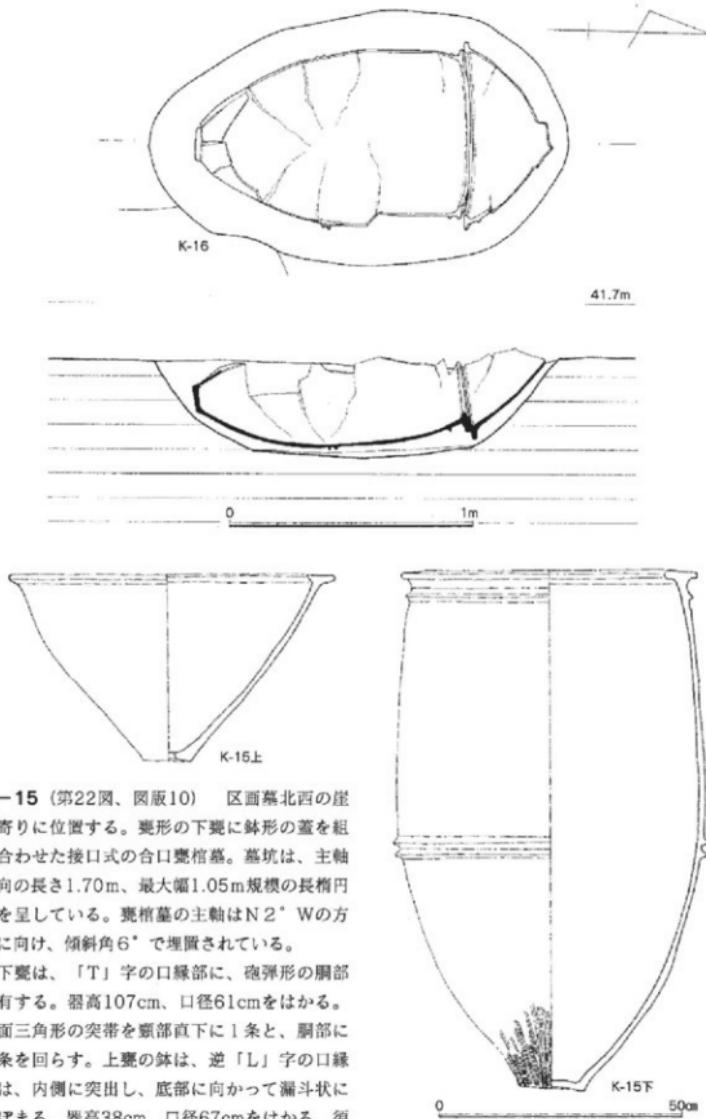
第20図 13号壺棺実測図 (1/10)



K-14 (第21図、図版8) 区画墓の中央トレンチの北、K-10・11の北側の崖面に位置する。崖面の崩落により大型棺の崩部を確認できたのみである。下葬とした場合の主軸はN24°Eで、ほぼ水平に埋置されている。葬棺は崩部以下の破片で、断面逆台形の突帯2条を回らす。底径は15cmをかり、器高100cm程度の大型の器種に復元されよう。

須玖式。

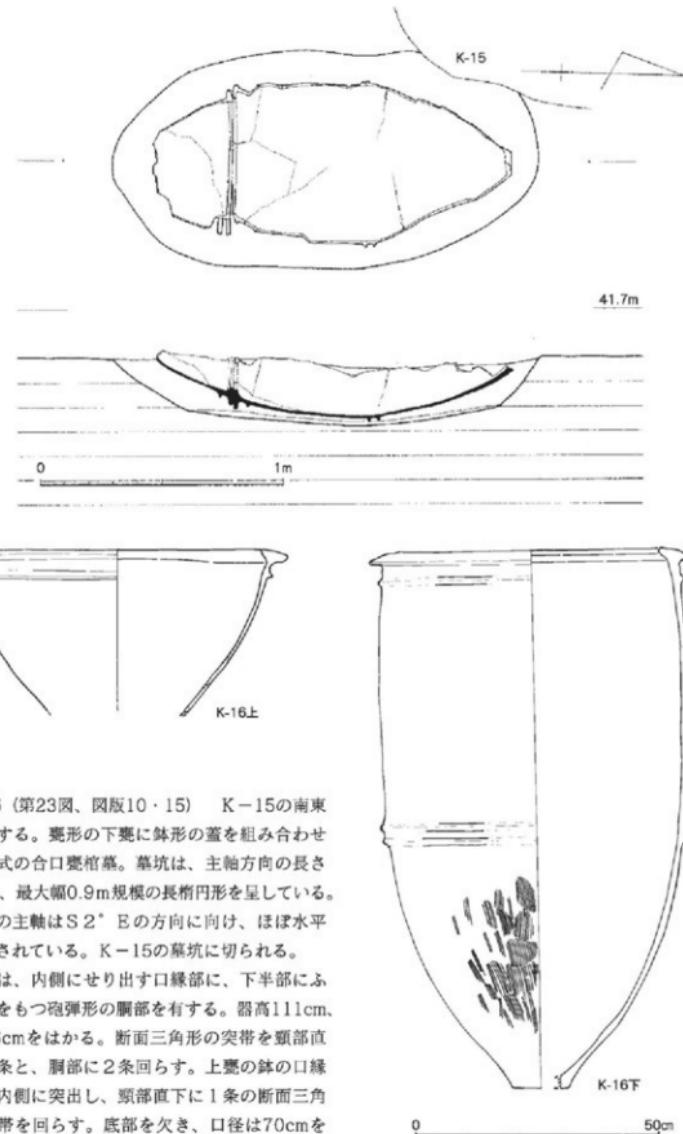
第21図 14号墓相基・墓棺実測図 (1/20・1/10)



K-15 (第22図、図版10) 区画墓北西の崖面寄りに位置する。変形の下部に鉢形の蓋を組み合わせた接口式の合口壺棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ1.70m、最大幅1.05m規模の長楕円形を呈している。壺棺墓の主軸はN 2° Wの方向に向け、傾斜角6°で埋置されている。

下部は、「T」字の口縁部に、突起形の肩部を有する。器高107cm、口径61cmをはかる。断面三角形の突起を頸部直下に1条と、頸部に2条を回らす。上部の鉢は、逆「L」字の口縁部は、内側に突出し、底部に向かって漏斗状にすぼまる。器高38cm、口径67cmをはかる。須玖式。

第22図 15号壺棺墓・壺棺実測図 (1/20・1/10)



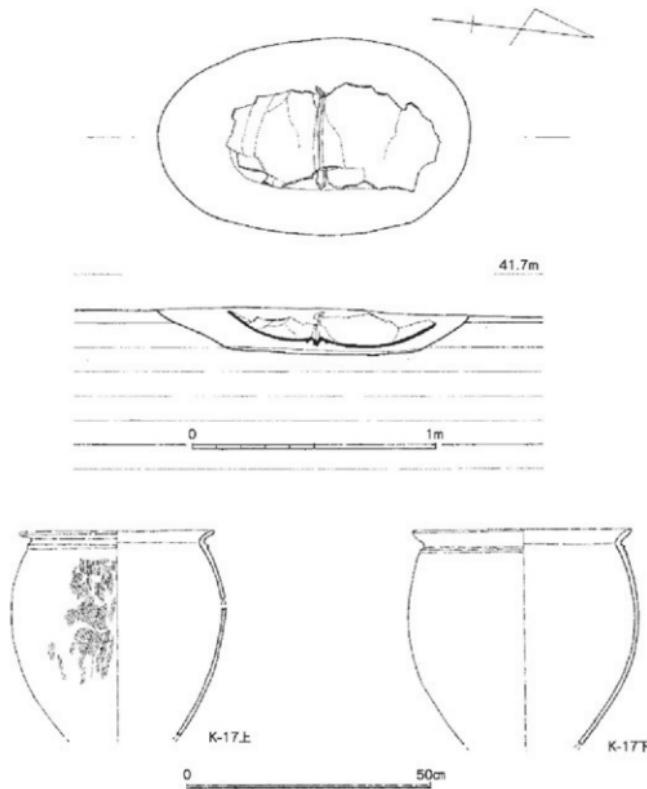
K-16 (第23図、図版10・15) K-15の南東に位置する。菱形の下甃に鉢形の蓋を組み合わせた接口式の合口要棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ1.73m、最大幅0.9m規模の長楕円形を呈している。要棺墓の主軸はS2°Eの方向に向け、ほぼ水平に埋置されている。K-15の墓坑に切られる。

下甃は、内側にせり出す口縁部に、下半部にふくらみをもつ砲弾形の胴部を有する。器高111cm、口径66cmをはかる。断面三角形の突帯を頭部直下に1条と、胴部に2条回らす。上臺の鉢の口縁部は、内側に突出し、頭部直下に1条の断面三角形の突帯を回らす。底部を欠き、口径は70cmをはかる。須玖式。

第23図 16号要棺墓・要棺実測図 (1/20・1/10)

K-17 (第24図、図版10・17) K-16の南東に位置する。ふたつの甕を組み合わせた接口式の合口甕棺墓。サイズが大きめの北側の甕を下甕とする。墓坑は、主軸方向の長さ1.37m、最大幅約0.80m規模の長楕円形を呈している。甕棺墓は主軸を S 7° W 向け、ほぼ水平に埋置されている。

上下ともに削平のため底部付近は遺存していない。下甕は、断面「く」字の口縁部を有し、頸部に断面三角形の突帯を回らす。口径50cmをはかる。上甕は、断面「く」字の口縁部を有し、肩部に断面三角形の突帯を回らす。口径40cmをはかる。外面にハケ目の調整痕をとどめる。立岩式。

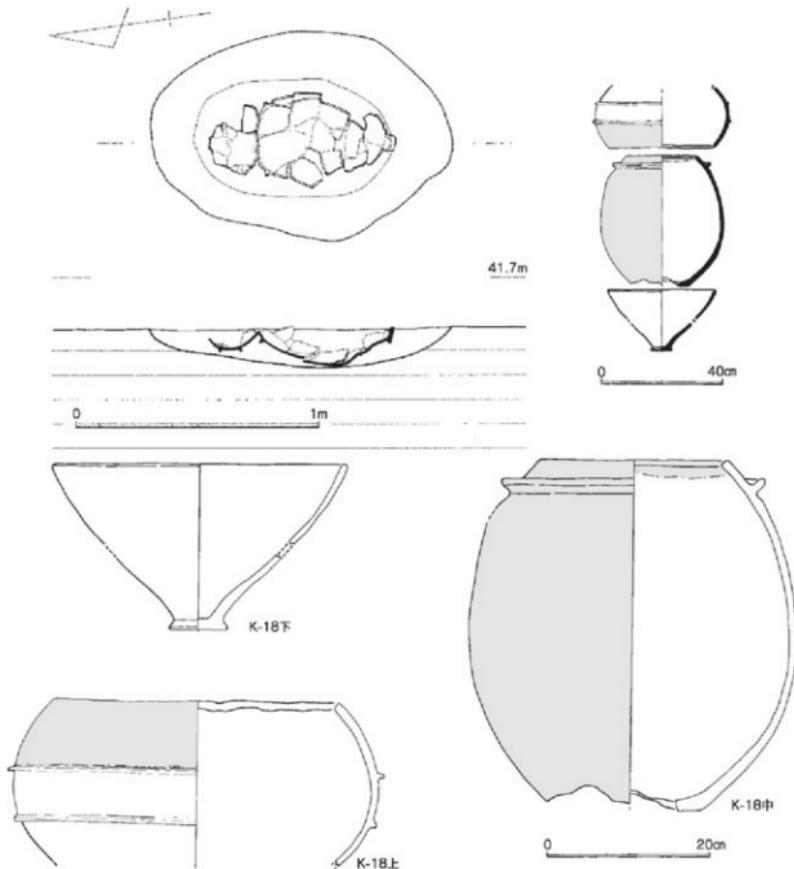


第24図 17号甕棺墓・甕棺実測図 (1/20・1/10)

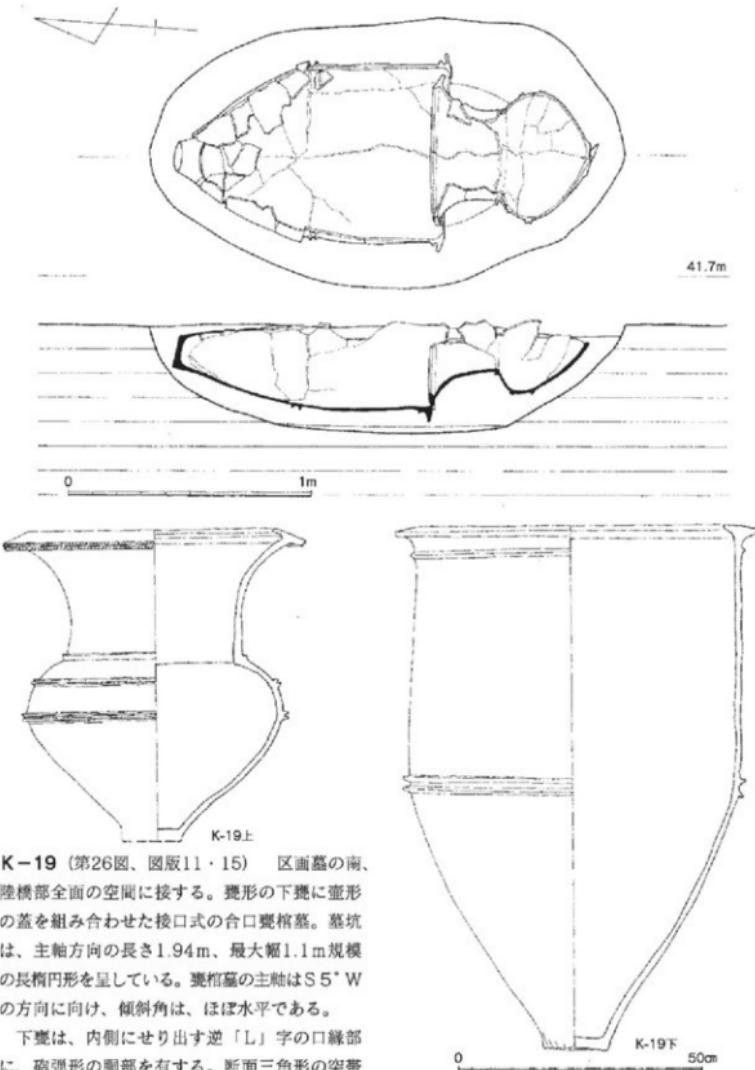
K-18 (第25図、図版10・16) 区画墓の南西、陸橋部の延長上に位置する。樽形土器と壺形土器の上部の打ち欠き部、鉢形土器を組み合わせた3連の土器棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ1.22m、最大幅0.85m規模の楕円形を呈している。削平が著しく原位置を保っているかどうか疑わしいが、土器は主軸をN7°Wの方向に向けて埋置されていた。

壺形土器は、口縁から肩部までを打ち欠いたもので、底部付近は削平によって失われている。腹部にやや扁平な2条の突帯を回らす。上半部に丹を塗布する。

中央の樽形土器は、丹塗りで底部を打ち欠いている。器高42cm、口径23cm、腹部最大径40.2cmをはかる。下甕は、鮮あるいは蓋形の土器が充てられている。底部は、立ち上がりの部分で屈曲する。器高20cm、口径35cmをはかる。須玖II式。



第25図 18号墓棺墓・墓棺実測図 (1/20・1/16・1/6)

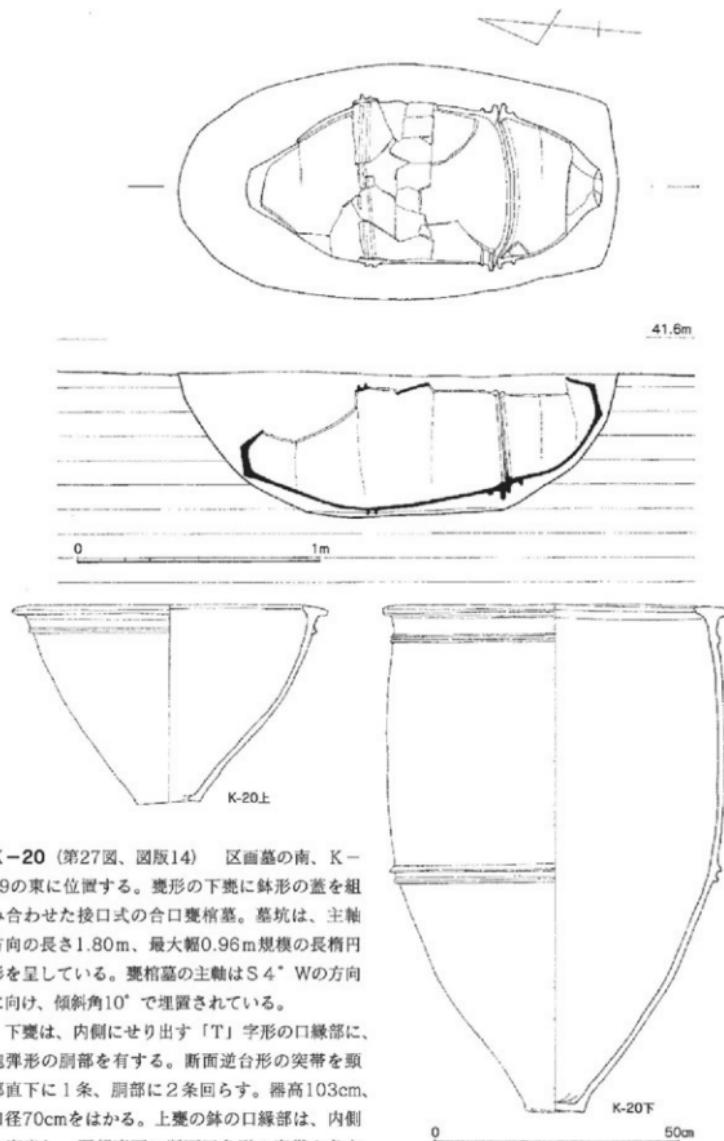


K-19 (第26図、図版11・15) 区画墓の南、陸橋部全面の空間に接する。菱形の下壺に壺形の蓋を組み合わせた接口式の合口菱棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ1.94m、最大幅1.1m規模の長楕円形を呈している。菱棺墓の主軸はS 5° W の方向に向け、傾斜角は、ほぼ水平である。

下壺は、内側にせり出す逆「L」字の口縁部に、砲弾形の胴部を有する。断面三角形の突帯を頸部直下に1条と、胴部に2条回らす。器高138cm、口径74cmをはかる。上壺の壺は、葫蘆状にゆるく外反する口頭部に垂下する口縁部を有する。頸部に断面三角形の突帯を1条、肩部に断面「M」字の突帯2条を回らす。復元器高で64cm、口径62cmをはかる。口唇部に刻目を回らしている。須玖式。

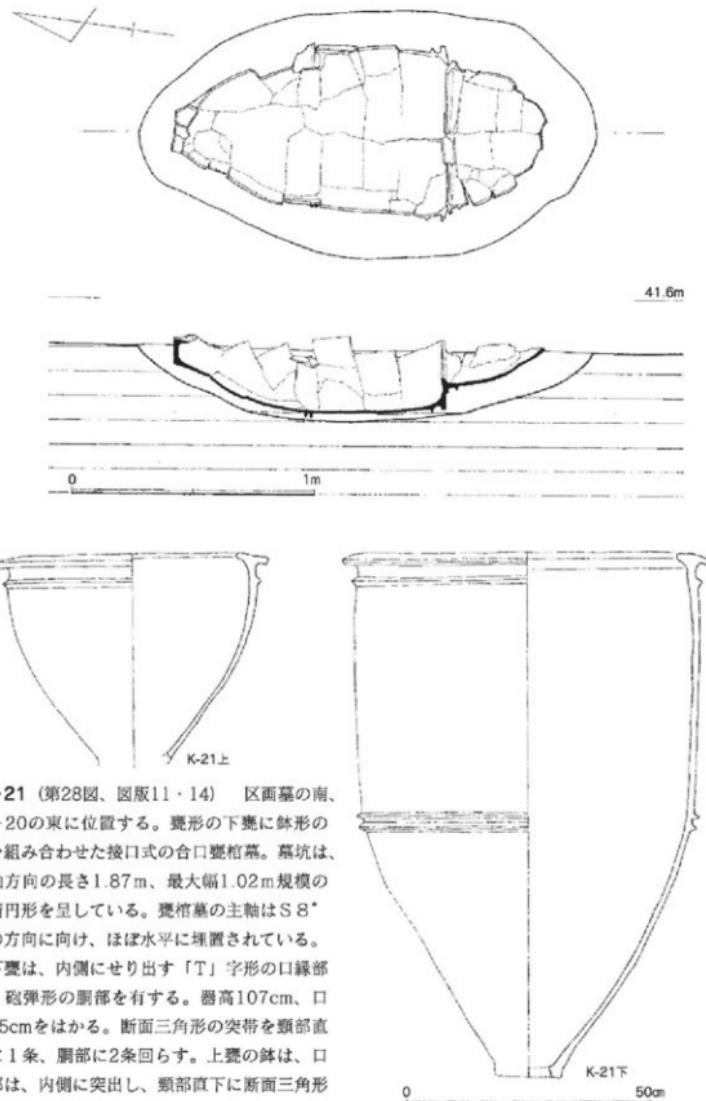
第26図 19号菱棺墓・菱棺実測図 (1/20・1/10)

138cm、口径74cmをはかる。上壺の壺は、葫蘆状にゆるく外反する口頭部に垂下する口縁部を有する。頸部に断面三角形の突帯を1条、肩部に断面「M」字の突帯2条を回らす。復元器高で64cm、口径62cmをはかる。口唇部に刻目を回らしている。須玖式。



K-20 (第27図、図版14) 区画墓の南、K-19の東に位置する。鑿形の下甕に鉢形の蓋を組み合わせた接口式の合口壺棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ1.80m、最大幅0.96m規模の長楕円形を呈している。壺棺墓の主軸はS 4° Wの方向に向け、傾斜角10°で埋置されている。

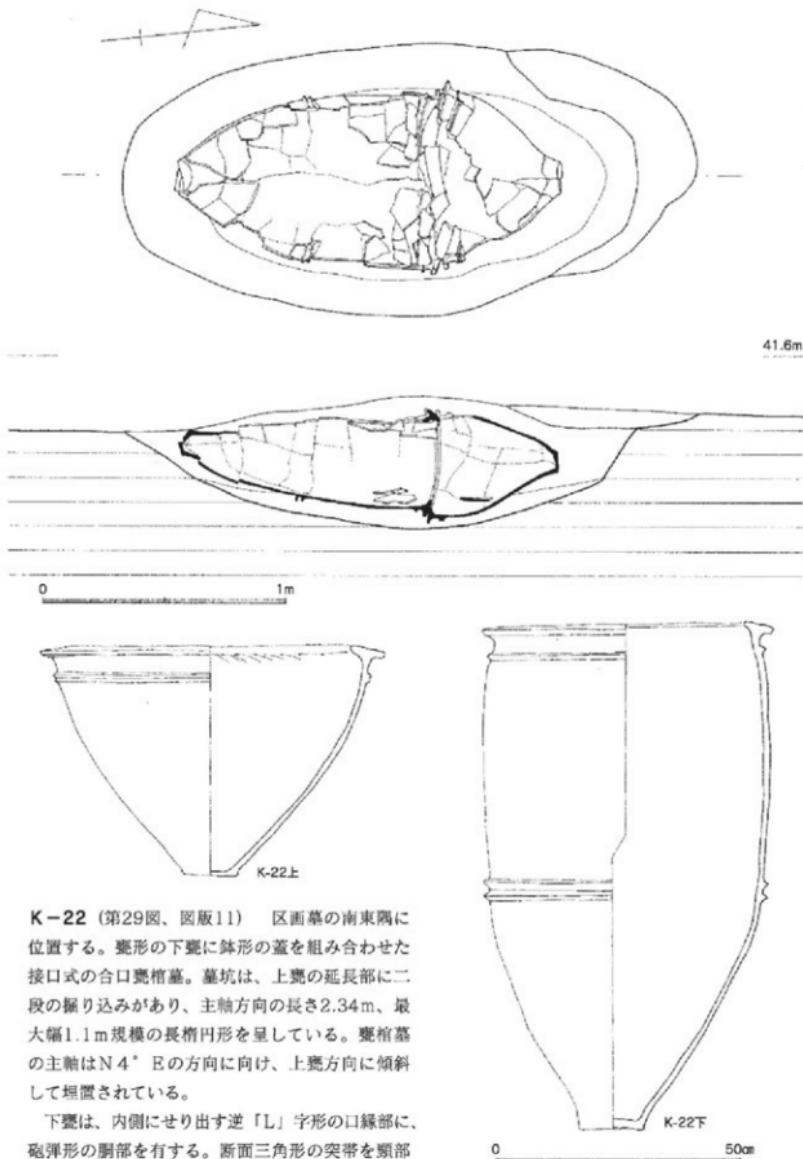
下甕は、内側にせり出す「T」字形の口縁部に、砲弾形の肩部を有する。断面逆台形の突帯を頸部直下に1条、肩部に2条回らす。器高103cm、口径70cmをはかる。上甕の鉢の口縁部は、内側に突出し、頸部直下に断面三角形の突帯1条を回らす。器高41cm、口径65cmをはかる。須玖式。 第27図 20号壺棺墓・壺棺実測図 (1/20・1/10)



K-21 (第28図、図版11・14) 区画墓の南、K-20の東に位置する。壇形の下蓋に鉢形の蓋を組み合わせた接口式の合口壇棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ1.87m、最大幅1.02m規模の長楕円形を呈している。壇棺墓の主軸はS 8°Eの方向に向け、ほぼ水平に埋置されている。

下蓋は、内側にせり出す「T」字形の口縁部に、砲弾形の脚部を有する。器高107cm、口径75cmを有する。断面三角形の突帯を頸部直下に1条、胴部に2条回らす。上蓋の鉢は、口縁部は、内側に突出し、頸部直下に断面三角形の突帯1条を回らす。口径56cmを有する。須玖式。

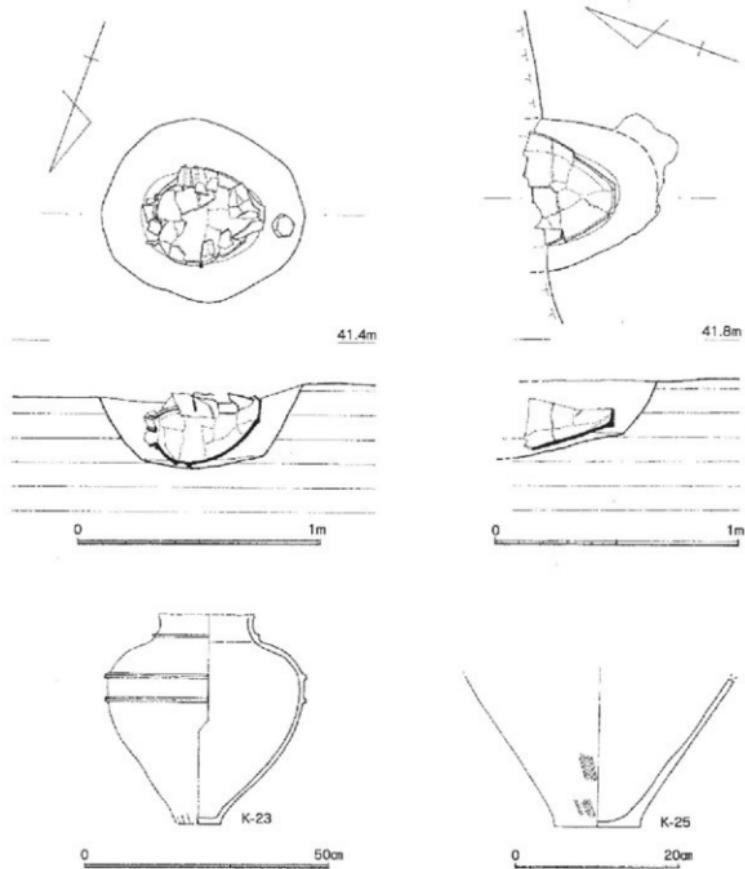
第28図 21号壇棺墓・壇棺実測図 (1/20・1/10)



K-22 (第29図、図版11) 区画墓の南東隅に位置する。菱形の下蓋に鉢形の蓋を組み合わせた接口式の合口壺棺墓。墓坑は、上蓋の延長部に二段の掘り込みがあり、主軸方向の長さ2.34m、最大幅1.1m規模の長楕円形を呈している。壺棺墓の主軸はN 4° Eの方向に向け、上蓋方向に傾斜して埋置されている。

下蓋は、内側にせり出す逆「L」字形の口縁部に、砲弾形の脇部を有する。断面三角形の突帯を頭部直下に1条、脇部に2条回らす。器高104cm、口 径60cmをはかる。上蓋の鉢は、口縁部は、内側

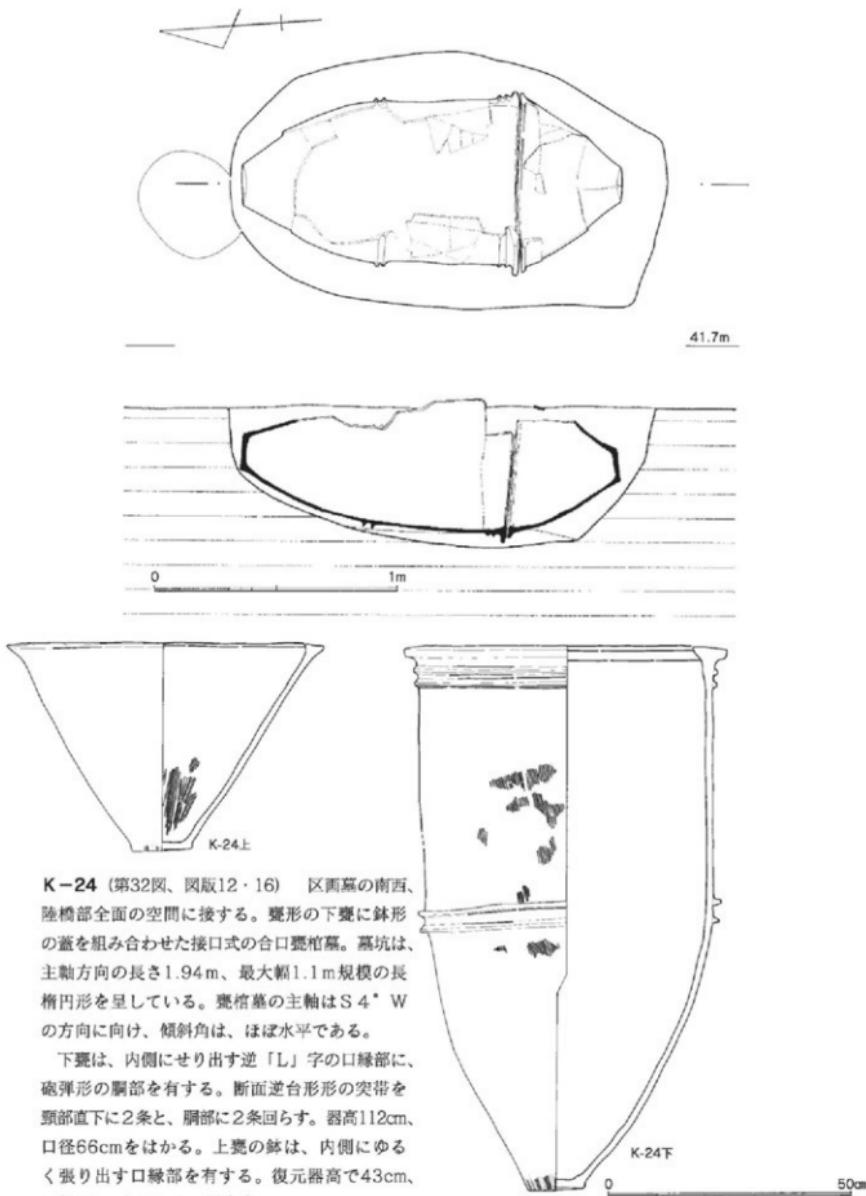
第29図 22号壺棺墓・壺棺実測図 (1/20・1/10)



第30図 23号甕棺墓・甕棺実測図 (1/20・1/10) 第31図 25号甕棺墓・甕棺実測図 (1/20・1/6)

に突出し、頸部直下に断面「M」字形の突帯1条を回らす。器高47cm、口径71cmをはかる。須玖式。
K-23 (第30図、図版11・16) 区画墓の南東隅に位置する。口縁部を打ち欠いた壺形土器を用いた单棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ0.83m、最大幅約0.75m規模の梢円形を呈している。甕棺墓は主軸をN71°Eの方向に向け、口縁部方向に若干傾斜して埋置されている。口縁部に木蓋の痕跡を示すくぼみは確認できなかつた。

壺は断面三角形の突帯を頸部直下に1条、胴部に断面「M」字形の突帯2条を回らす。現存高43cm、胴部最大径41cmをはかる。須玖II式。



K-24 (第32図、図版12・16) 区画墓の南西、陸橋部全面の空間に接する。菱形の下蓋に鉢形の蓋を組み合わせた接口式の合口壺棺墓。墓坑は、主軸方向の長さ1.94m、最大幅1.1m規模の長楕円形を呈している。壺棺墓の主軸はS 4° W の方向に向け、傾斜角は、ほぼ水平である。

下蓋は、内側にせり出す逆「L」字の口縁部に、碗弾形の脣部を有する。断面逆台形の突帯を頭部直下に2条と、脣部に2条回らす。器高112cm、口径66cmをはかる。上蓋の鉢は、内側にゆるく張り出す口縁部を有する。復元器高で43cm、口径65cmをはかる。須玖式。

第32図 24号壺棺墓・壺棺実測図 (1/20・1/10)

K-25 (第31図) 区画墓の北側、K-15北の崖面に位置する。崖面の崩落により甕棺が存在した痕跡をとどめるのみ。墓坑は、主軸方向の長さ0.83m、最大幅約0.75m規模の梢円形を呈している。甕棺墓は主軸をN21°Eの方向に向けて埋置されている。

底径10cmであることから器高60cm代の中型棺と推定される。須玖式か。

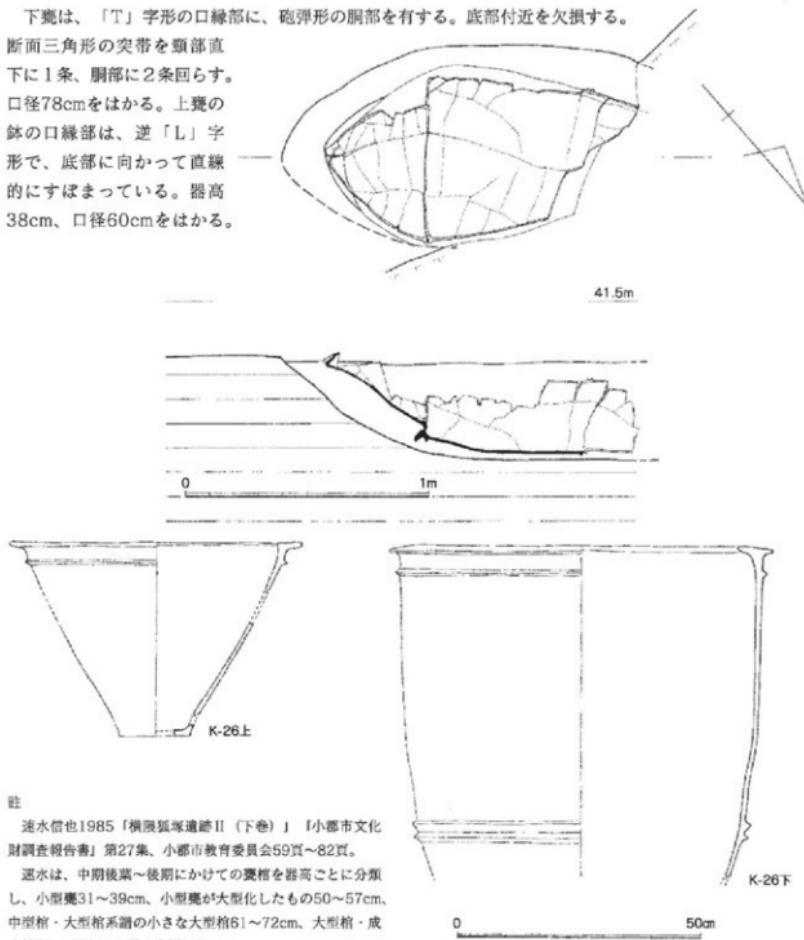
K-26 (第33図、図版12) 区画墓の北東隅の崖面に位置する。甕の下蓋に鉢形の蓋を組み合せた接口式の合口甕棺墓。墓坑は、北側が崩落しており、甕棺墓の主軸はS49°Eの方向に向け、ほぼ水平に埋置されている。

下甕は、「T」字形の口縁部に、砲弾形の胴部を有する。底部付近を欠損する。

断面三角形の突帯を頭部直

下に1条、胴部に2条回らす。

口径78cmをはかる。上甕の
鉢の口縁部は、逆「L」字
形で、底部に向かって直線
的にすぼまっている。器高
38cm、口径60cmをはかる。

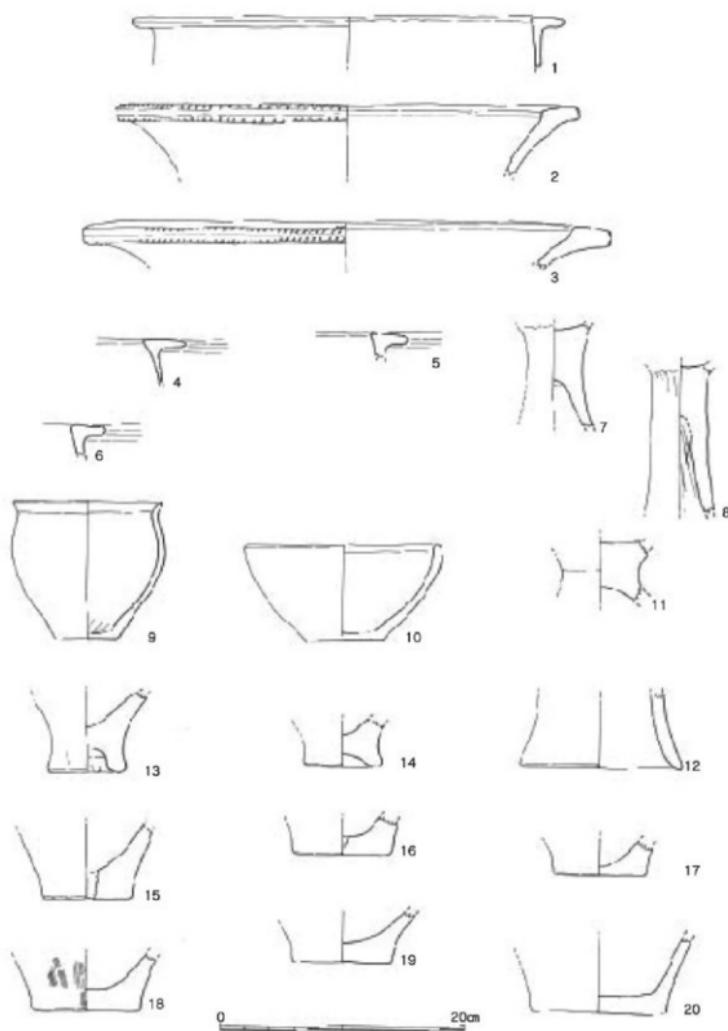


註

速水信也1985「横須賀城遺跡II(下巻)」「小都市文化財調査報告書」第27集、小都市教育委員会59頁~82頁。

速水は、中期後葉～後期にかけての甕棺を器高ごとに分類し、小型甕31～39cm、小型甕が大型化したもの50～57cm、中型棺・大型棺系譜の小さな大型棺61～72cm、大型棺・成人生棺78cm以上の4群に大別した。

第33図 26号甕棺墓・甕棺実測図 (1/20・1/10)



第34図 西区画溝出土遺物実測図 (1/4)

V 区画溝出土の遺物 (第34~42図)

区画墓の外周は、陸橋部をはさんで西側を西区画溝、東側を南区画溝とし、区画墓の東辺に沿って掘削された部分を東区画溝とよぶ。各区画溝の遺物出土状況は、西区画溝では土層ベルトよりも北側に分布し、南区画溝では土層ベルトの東に集中しており、東区画溝では溝全体に分布がみられる。

西区画溝で検出された弥生前期末の土器は、区画墓築造前の遺構や包含層の遺物が主体となり区画墓の時期に該当する遺物は少ない。

甕棺墓の時期にあたる須恵II式段階の土器は、南区画溝の東側と東区画溝に集中している。このなかには筒形器台や高杯、壺など丹塗りの土器が多く含まれており葬送儀礼や墓前祭祀に供されたと考えられる。土器の出土レベルは溝の底からやや浮いた状態で出土しており、区画溝が埋まる過程で流入したと考えられる。土器群は墳丘側から流れ込んだと断定できる状況はみられない。

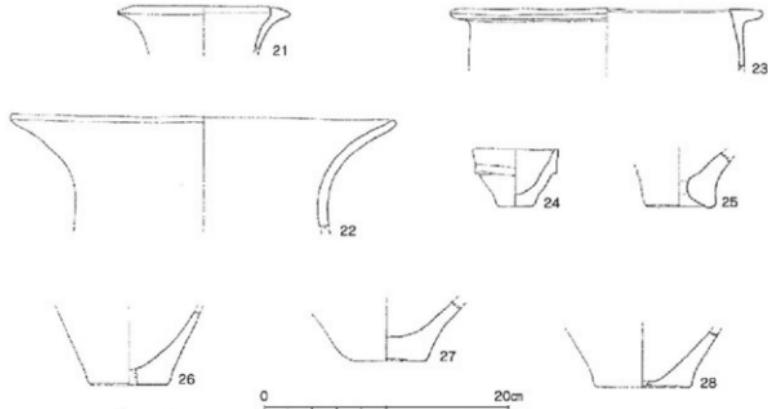
陸橋部に接続する区画墓の南西隅は、墓群の空白地帯となっている。このスペースは、削平のため原位置をとどめる土器はないが、陸橋の両側にも遺物の分布はみられていないので、少なくとも土器が放置されるような状況はなかったと推定される。

以上から土器を用いた祭祀の空間として、南と東の区画溝の外周を候補とする。

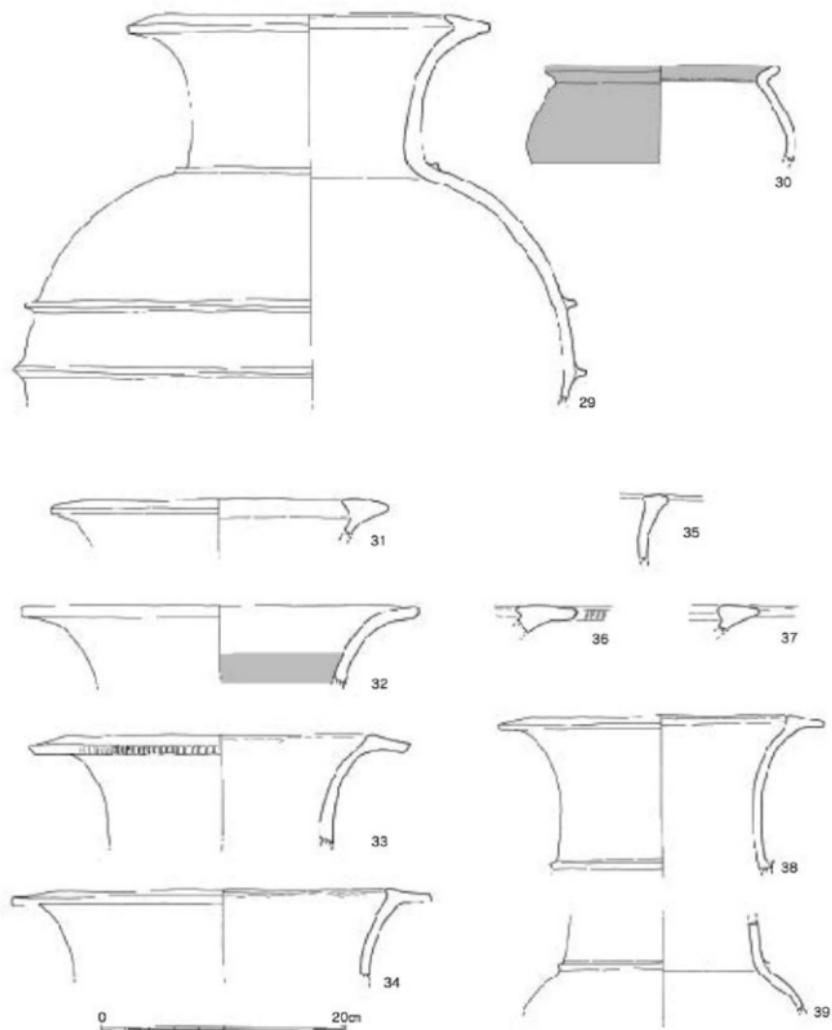
西区画溝出土土器 (第34図、図版18)

前期末から中期初頭段階の遺物として2・3・12・14・15・16・17がある。甕の口縁部に須恵式段階の土器片が含まれているが、何れも小片である。

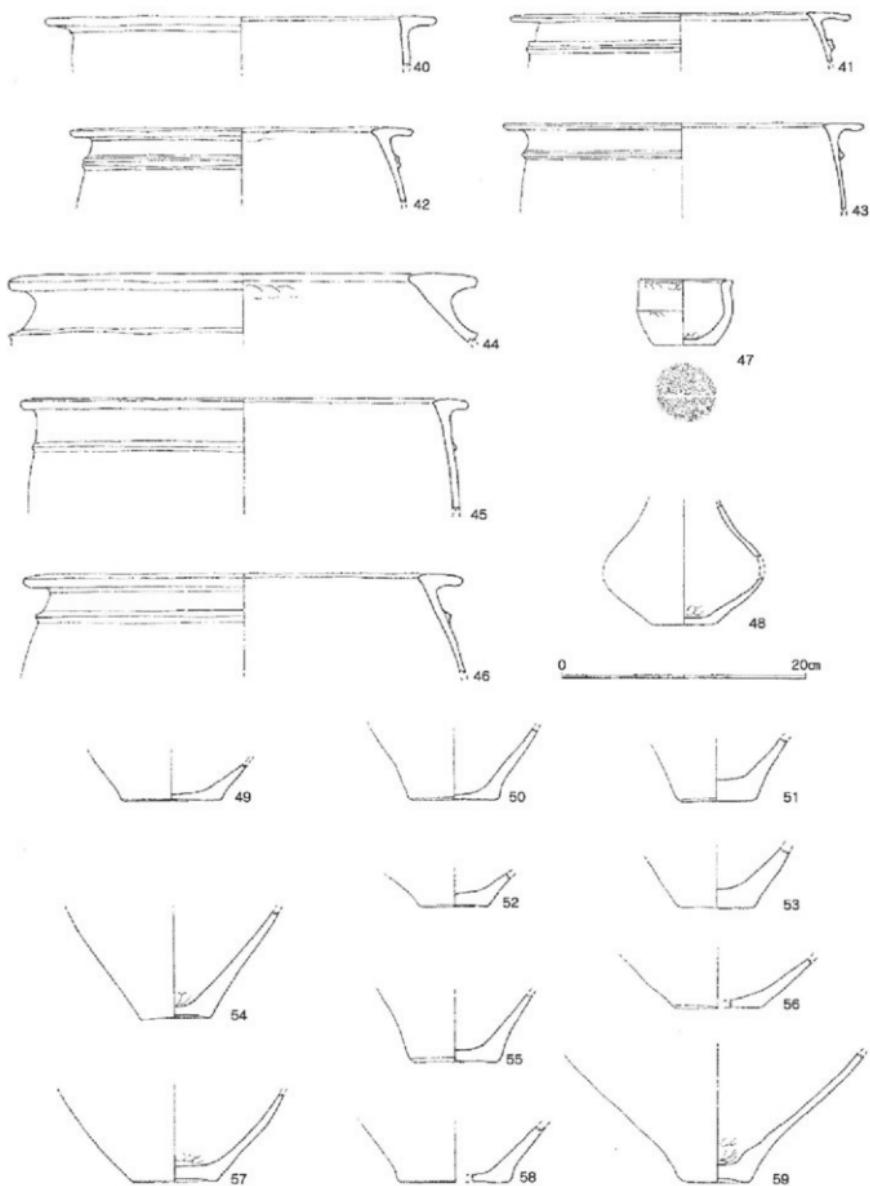
2の口径は、図よりも広がり、3の口縁部の傾きは、もう少し立ち上がるかもしれない。9の小型甕と10の鉢は、中期後葉から後期はじめの器種として本地点の中では遺存度がよい。



第35図 南区画溝出土遺物実測図1 (1/4)



第36図 南区画溝出土遺物実測図2 (1/4)

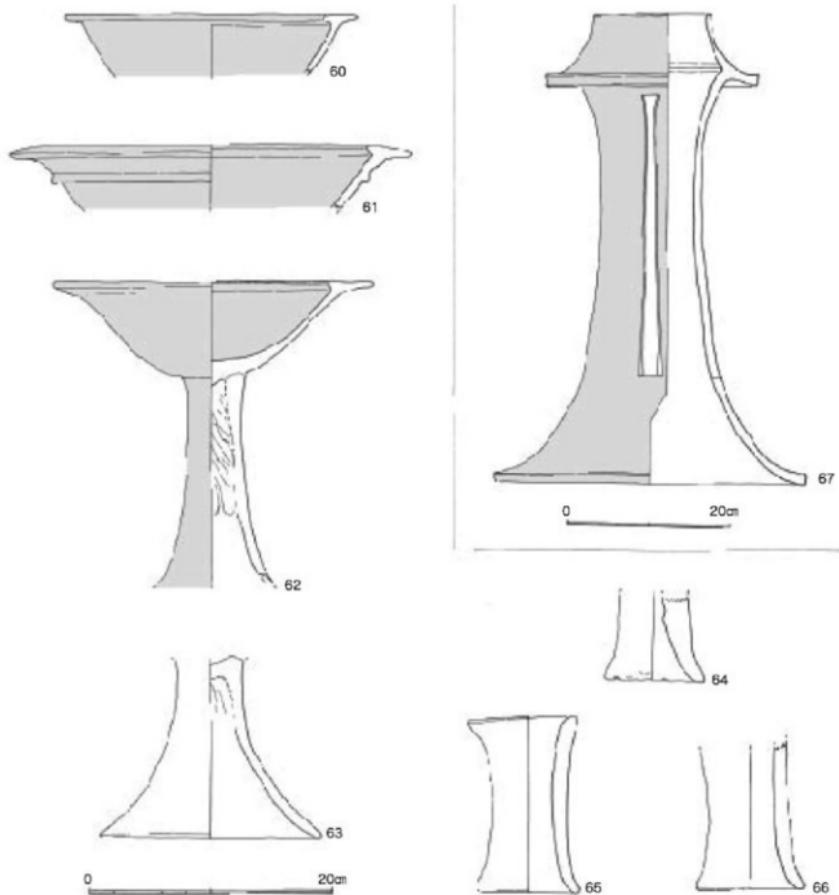


第37図 南区面溝出土遺物実測図3 (1/4)

南区画溝出土土器（第35～38図、図版18）

1（第35図）は、南区画溝の西側の出土遺物で図化できる資料は少ない。分布の主体は全体図（第2図）にあるとおり東側に偏っている。

2～4は、南区画溝の土器の主体となる土器群である（第36・37・38図）。底部や口縁部に中期初頭段階にさかのぼる小片を混入するが、多くは須玖II式段階の土器群によって構成されている。広口壺・甕・高杯・有窓の筒形器台など祭祀土器の典型となる器種が揃っている。47の小型鉢の外底



第38図 南区画溝出土遺物実測図4 (1/4・1/6)

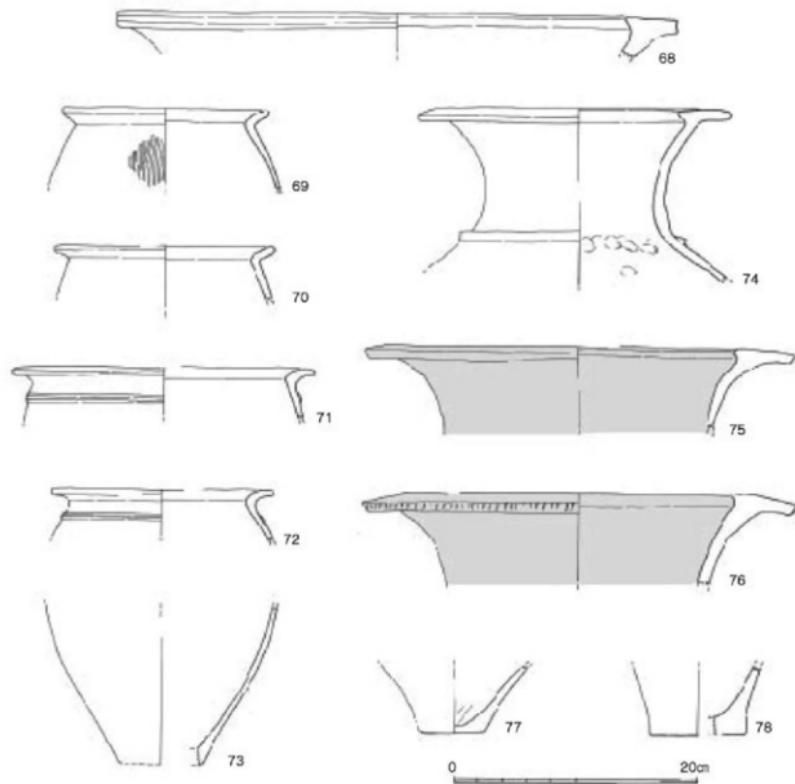
部には条線が1条刻まれている。64~66は器台である。

丹塗り土器は、器表面の摩滅によって赤色顔料の痕跡がかろうじて認められる程度である。固化した資料のなかには、本来丹塗り土器だった資料が含まれている可能性がある。須玖II式段階の土器群でも大型壺29や高杯の受部60・61は、口縁部が内側に迫り出しており新段階の特徴を呈している。有窓の筒形器台67は、北筑後の祭祀土器とも共通する型式であり、祭祀の道具立てとして広義の北部九州における分布に注目したい。

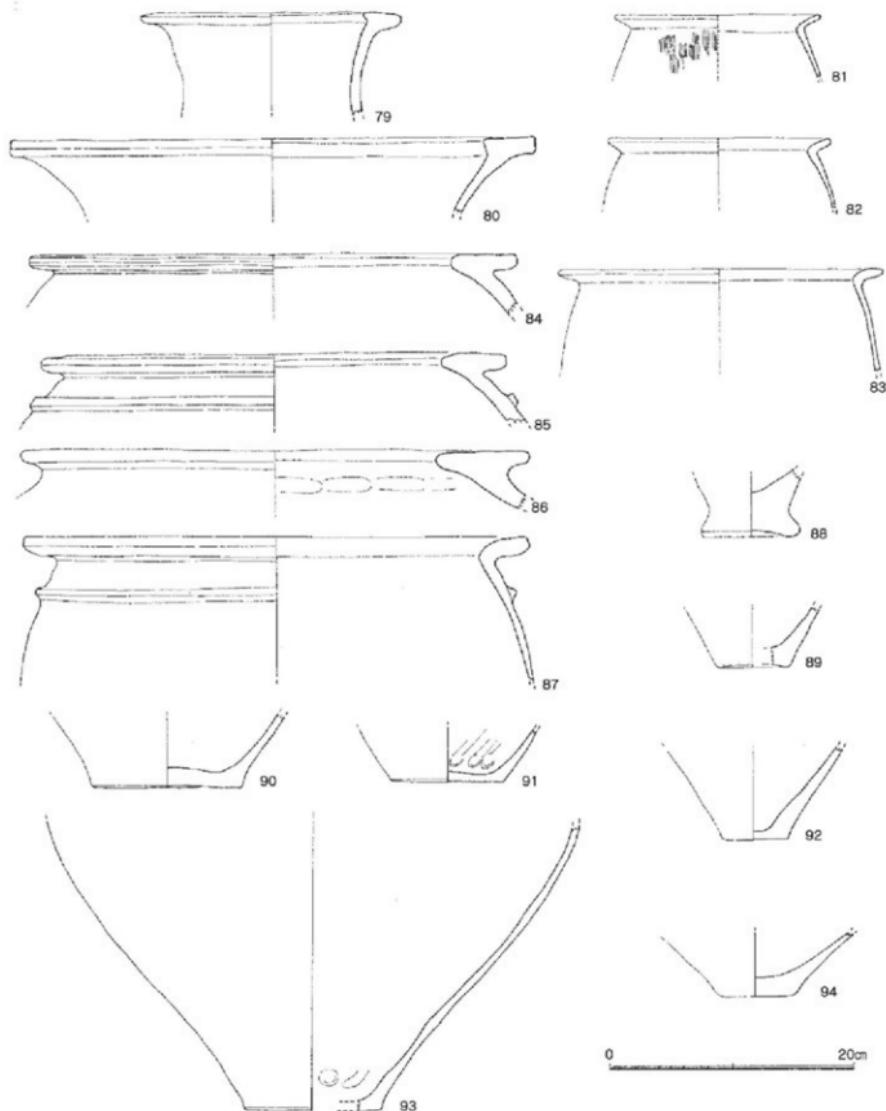
東区画溝出土土器 (第39~41図、図版18)

土器の量は、南区画溝に及ばないが遺存度の良い高杯や壺(101・104)が含まれている。97の注口土器は、九州北部の拠点集落の祭祀土器に散見される器種である。

土器の主体は、須玖II式段階の土器群でも古相から新相まで幅をもっている。暗文調整は、摩滅の



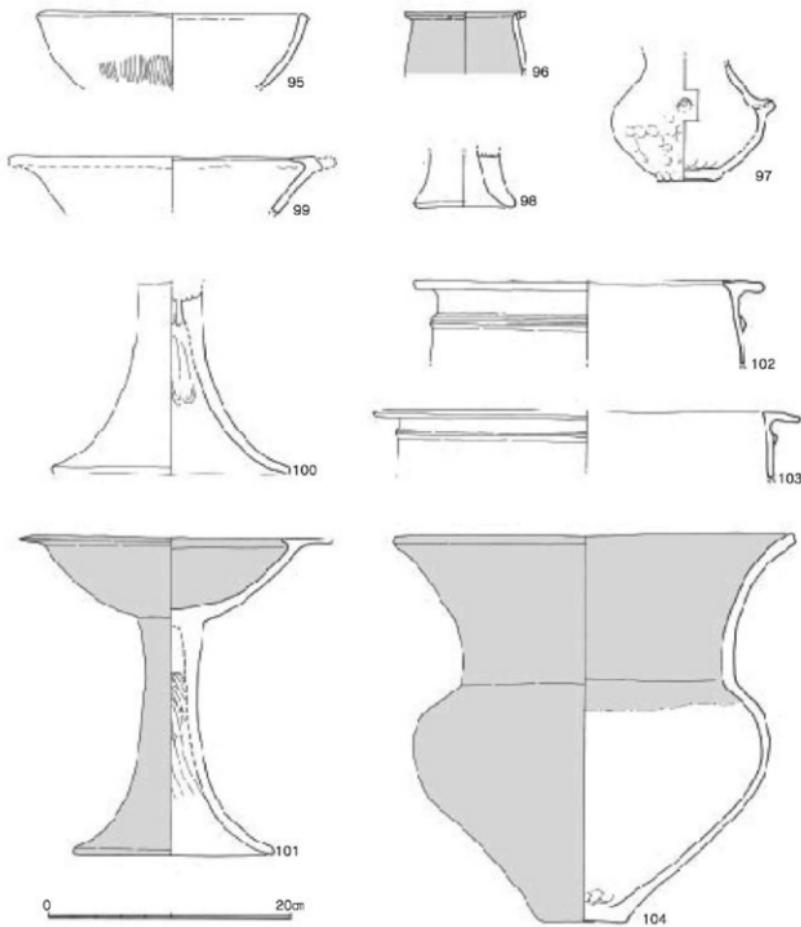
第39図 東区画溝出土遺物実測図1 (1/4)



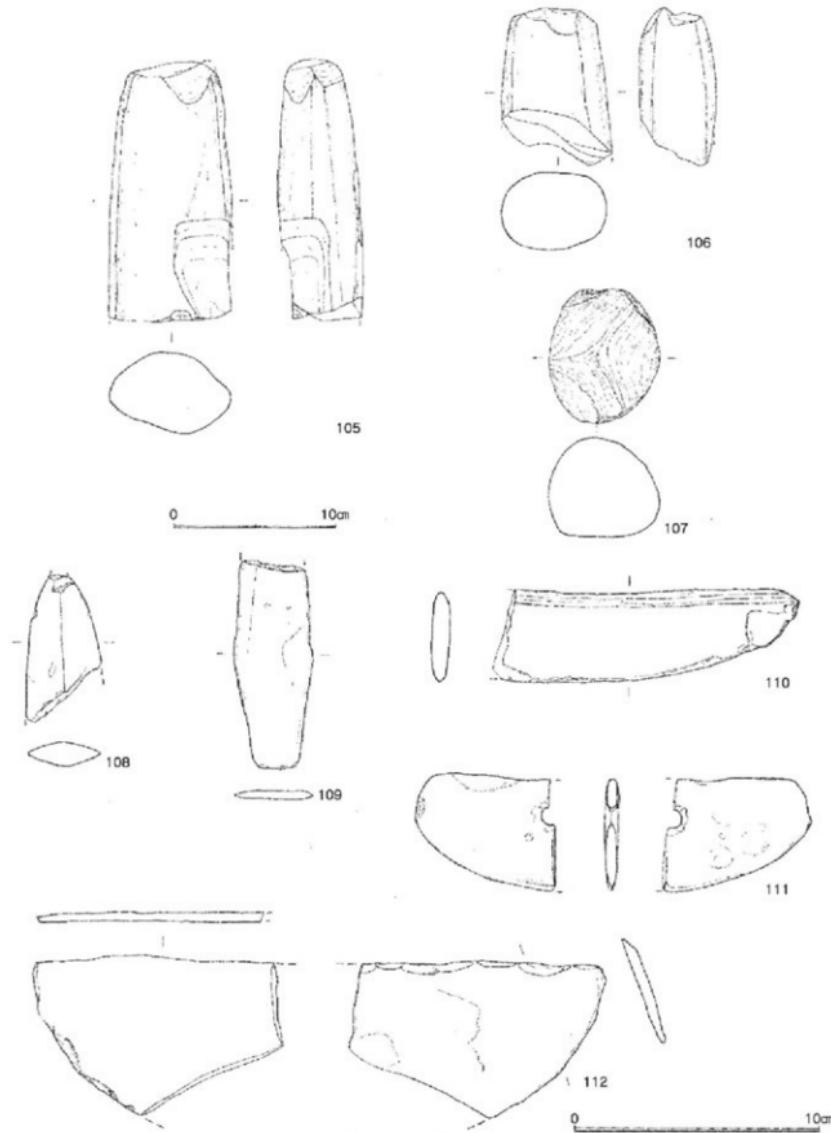
第40図 東区画溝出土遺物実測図2 (1/4)

ため観察することはできない。

区画溝出土の丹塗り土器の様相を通観すると、全般に突帯による装飾性に乏しいという傾向が指摘できる。また福岡平野の該期の土器相に通有ともいえる瓢壺や有蓋の短頸壺などの器種がみられないことも、本遺跡の区画墓の性格を理解するうえで注目すべきである。



第41図 東区画溝出土遺物実測図3 (1/4)



第42図 区画溝出土石器実測図 (1/2・1/3)

区画溝出土の石器（第42図）

太形蛤刃石斧は、何れも玄武岩を素材とする。105は、東区画溝で出土した。刃部を欠損し、さらに剥落がみられる。この剥離面と接合する剥片が西区画溝で出土している。

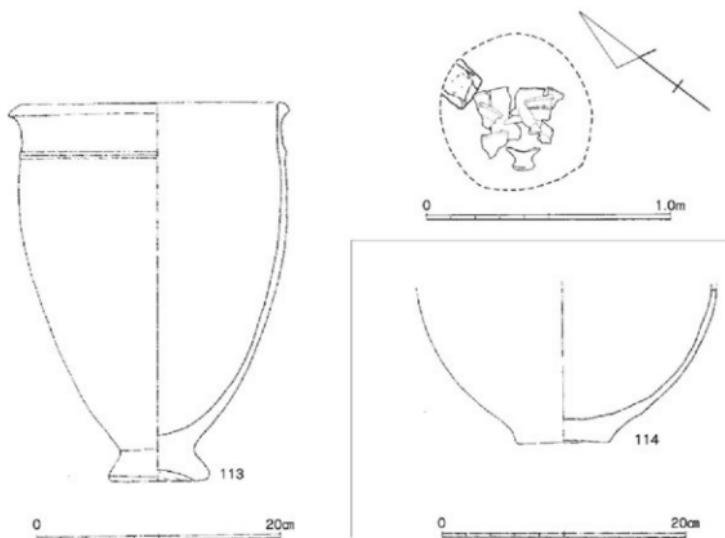
107は花崗岩を用いた叩き石で、両頂部に敲打痕がみられる。108は、磨製石剣の切先で、南と東の区画溝の境目付近で出土した。109は、扁平な武器形石器の一種である。110は、石鎚の先端付近の破片である。111は、石包丁の破片で、両面穿孔が施されている。112は、大型石包丁の木製品の破片である。

墳丘出土の遺物（第43図）

区画墓墳丘の基盤となるのは、褐色の地山とその上に堆積した弥生中期初頭の文化層であることは先に述べた。

113は区画墓西トレチの南側で検出された壺形土器である。横方向に倒れた状態で検出された。口縁部は未発達で、口縁下に断面三角形の突帯が回る。底部は、上底気味である。器高31cm、口径23cmに復元される。

114はその1mほど南で、K-24に切られた状態で検出された。113と同時期の壺形土器の破片で、底径7.8cmをはかる。



第43図 区画溝墳丘出土遺物実測図（1/4）

VI 浦江遺跡13号甕棺墓出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎

浦江5次13号甕棺墓から採取された赤色顔料について材質調査を行った。弥生～古墳時代の赤色顔料には酸化第二鉄(Fe_2O_3)を主成分とするベンガラと、硫化水銀(HgS)を主成分とする朱が知られている。今回の対象資料は一握りに満たない土塊内に数mm大の顔料塊が散在する程度の量で、重量などの定量化は困難な状況である。合わせて甕棺墓の上土と下土それぞれ別個に採取されているが、いずれも鮮やかな赤色を呈し、特に違いは認められない。実体顕微鏡による6.3～40倍程度の観察でも、両者共に顕微鏡の照明を反射してギラギラと輝く鮮やかな赤色粒子が見られ、見た目には同種で異なる粒子の混入も認められない。その色調からは、過去の類例調査の経験などから朱であることが推測された。

次に蛍光X線分析による材質調査を行った。この方法は試料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線(特性X線)を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。蛍光X線分析では各顔料の主要成分、つまりベンガラであれば鉄(Fe)、朱であれば水銀(Hg)の検出により両者を判別することとなる。ただしベンガラの場合、土壤中にも鉄分が含まれることから、鉄の検出のみをもってベンガラの存在を肯定することにはならず、注意を要する。分析は資料の中から顔料を含む小土塊を取り出し試料台にそのままの状態で置き、顔料の部分にX線が照射されるように設置して非破壊で行っている。今回使用した装置はエネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置(エダックス社製/Eagle μ probe)で、X線の照射面積が0.3mm ϕ と細かく統れることから、微小な顔料塊の調査に有効である。

分析の結果、明瞭な水銀(Hg)のピークが検出された。硫化水銀におけるもう一つの主要元素である硫黄(S)については、装置管球から発生するモリブデン(Mo)のピークと重複するため判別が困難であるが、事前の顕微鏡観察とも合わせて、本資料は朱であると考えられる。

考古資料としての赤色顔料が市毛鼎氏や本田光子氏によって、その地位を与えられて久しい。この間、これら先学らの地道な調査研究により、時代や地域などによる使い分け、併用の仕方に止まらず、朱の粒度が発色に関与するだけではなく時代的な特徴を示すことなども明らかにされている他、最近では含まれる硫黄の同位体を測定することによる産地推定が試みられるなど新たな展開も見せ始めている。今回の調査はこれら数多くの情報を内包する顔料を知るはじめの一歩でしかないが、極基礎的な情報として顔料史の解明に役立てば幸いである。なお紙幅の関係上、分析装置の作業条件や参考文献は割愛させていただいた。

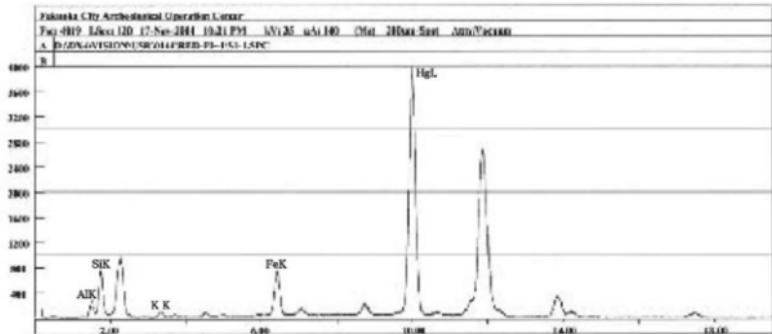


表1 赤色顔料蛍光X線分析結果

VII 浦江遺跡第2次調査の記録

例　　言

1. 本稿は平成3年(1991)11月6日に福岡市教育委員会が行った、西区大字金武字山田の上所在、浦江遺跡第2次調査の報告である。
2. 発掘調査は台風災害復旧の擁壁建設工事に伴う調査として行った。
3. 本書に使用した遺構実測図作製は井澤洋一・吉武　学が⁴、遺物実測図作製・図の製図は田中克子が⁵、本文執筆は吉武が行った。
4. 本書に使用した方位は全て磁北である。
5. 本書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号:9138、遺跡略号:URE-2、調査地地籍:西区大字金武字山田の上、

分布地図番号:94 金武 0444、調査面積:5m²、調査日:1991年(平成3年)11月6日

本文目次

1. 調査の概要	44
2. 壱棺墓	44

挿図目次

第44図 浦江遺跡第2次調査地点の位置(1/8,000)	44
第45図 壱棺墓の位置(1/400)	45
第46図 壱棺墓の出土状況(1/30)	45
第47図 壱棺(1/8)	45

調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉(当時)、植木とみ子(現)

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾　学(当時)、山口謙治(現)

埋蔵文化財課第1係長 飛高憲雄(当時)、田中壽夫(現)

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 寺崎幸男(当時)、文化財整備課管理係 御手洗　清(現)

調査担当 埋蔵文化財課主任文化財主事 井澤洋一

埋蔵文化財課第1係 吉武　学(現調査第2係)

整理協力 田中克子

1. 調査の概要 (第44・45図)

調査地点は青振一郷盛山丘陵から東へ伸びた台地の先端部で、東を流れる室見川により台地が削られ、調査地点付近では比高差約15mの急崖となっている。平成3年9月14日に九州を襲った台風17号により台地端部の土砂が流れ出し、崖面が崩壊した。福岡市西区土木農林課はこの早急な復旧に追られたが、現地では甕棺墓が崖面に露呈していたことから、復旧擁壁工事に先立ち市教育委員会埋蔵文化財課に調査を依頼した。埋蔵文化財課では、まず現地踏査を行い弥生時代の甕棺2基であることを確認し、次に甕棺を取り上げるための簡単な緊急調査を実施することとした。調査は飛散した甕棺の採集、及び露出する2基についての清掃、写真撮影、実測、及び周辺地形の実測を行った後、さらに崩壊するおそれのある部分のみを取り上げるに留め、それ以外は現状保存とした。

2. 甕棺墓

1号甕棺墓(K-1) (第46・47図)

西側に位置する。崖崩れにより甕の下半部が露呈した。おそらく合口甕棺の下甕であろう。底部を北西に向けており、甕底は流出し失われている。口縁部は土中にあり、取り上げていない。地表面から0.55~0.85mの深さにあるが、墓壙は未確認である。

1は甕の下半部のみの残穴で、底部を欠く。全体の一部にすぎないため実測図の傾きは不正確である。胴部に上向きのM字突帯を貼り付ける。器面が著しく荒れており調整不明。淡い褐色~淡い赤褐色を呈し、胎土に径2~3mmの白色砂粒を多量に含み、焼成良好である。

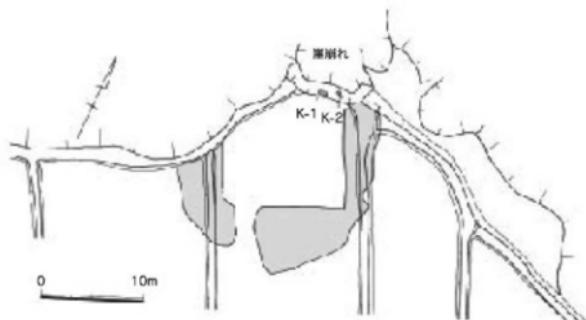
2号甕棺墓(K-2) (第46・47図)

東側に位置する。甕の口縁部から胴上半部にかけてが露呈した。口縁を西に向いているが、口縁部は崖崩れによりずり落ちて原位置にない。胴部は地表面から0.85~1.0mの深さにあり、ここが本来の埋納レヴェルであろう。甕棺の傾斜からみて上甕である可能性が強いが確証はない。

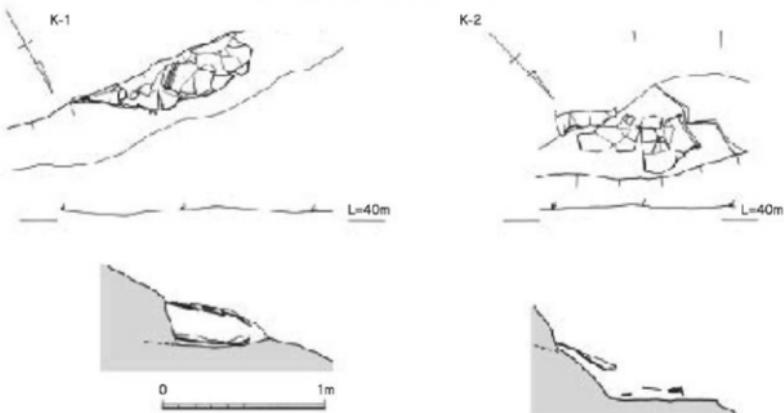
2は甕の上半部で、約1/2周が残る。胴部が張り出し、口縁は「く」字形に屈曲して開き、内面に稜を持つ。口縁端部は面取りする。口縁直下に断面台形の低い突帯を回し、横ナブ調整を加える。器面が荒れており調整は不明。淡褐色を呈し、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好。



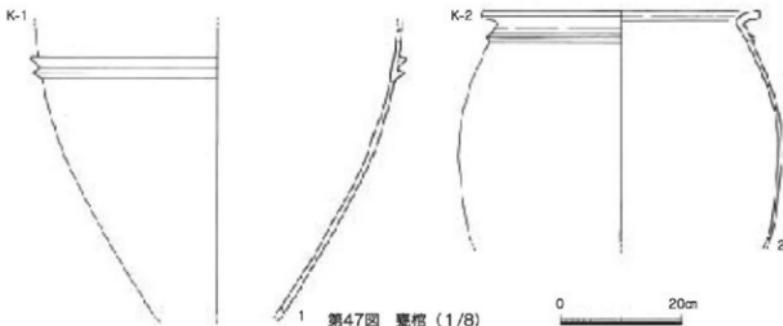
第44図 浦江遺跡第2次調査地点の位置 (1/8,000)



第45図 壕棺墓の位置 (1/400)



第46図 壕棺の出土状況 (1/30)



第47図 壕棺 (1/8)

VIII まとめ 浦江遺跡5次調査の区画墓の位置づけ

弥生中期の墓制について I 中期初頭、II 中期前葉、III 中期中葉、IV 中期後葉の時期区分で早良平野の様相を俯瞰する。甕棺の型式については、調査者による編年観のズレをおさえるため公約数的な時期区分を採用する。以下墓制の分類にあたって溝口孝司氏の用語にならって記述する（溝口1998）。

「列 墓」 墓地における統一的秩序の形成が列形成指向となってあらわれたものが前期段階からみられる。その指向の度合いが徹底されたものが中期前半にかけて盛行した二列埋葬墓となる。

「系列墓」 現存の甕棺墓の周囲に新たな甕棺墓を営むことの繰り返しによって形成された墓群およびその集合をさす。いわゆる集塊状を呈する金の隈遺跡のような甕棺墓群は系列墓に分類される。

「区画墓」 溝や墳丘で区画された墓域を区画墓とする。区画墓には削平によって墳丘の有無が確認できない場合がある。このほか隈・西小田遺跡のように独立丘陵の頂部に方形区画を意識した墓域を地山削り出しによって形成した事例も含める。

	時期区分	甕棺の型式名	日常土器
I	中期初頭	金海式（新段階）	城ノ越式
II	中期前葉	城ノ越式・汲田式	城ノ越式・須玖式（古）
III	中期中葉	須玖式	須玖式（中）
IV	中期後葉	立岩式（古段階・新段階）	須玖式（新）

表2 時期区分と甕棺・日常土器の対応関係

北部九州における区画墓の変遷（第47図）

I期の吉武高木は個々の埋葬がアミをかけた範囲につくられたという想定で区画の存在を考慮したもので、墳丘や区画溝が確認されたわけではない（横山・力武1996）。現在消滅してしまったが、板付田端遺跡は、中山平次郎氏の踏査所見からI期の墳丘墓と考えられる（中山1917）。銅劍・銅矛など複数の青銅器が出土した甕棺墓群の分布が推定される。出土地には200m²ほどの広さで高さ3m程度の高まりがあったことがわかっており、墳丘をもつ区画墓であった可能性がある。

II期の比恵遺跡6次の区画墓は甕棺墓群の分布から推定したものである（横山1983）。周辺域の調査から長軸25m、短軸18m程度の区画墓が復元される。埋葬主体に棺底が削竹形の断面をもつ木椁墓1基が含まれている。

吉野ヶ里の北墳丘墓は、II～III段階の区画墓として、銅劍を主体とする青銅器の推移を考えるうえで重要である（七田1997）。

III期の吉武糧波は、III～IV期の墳丘墓である。III期の甕棺墓からは銅劍、IV期の甕棺墓からは鉄製品と小型の漢式鏡がともなう。後世の擾乱をうけているが、須玖岡本D地点や三雲南小路遺跡のような厚葬墓へ発展した形跡はみられない（横山・力武1996）。那珂遺跡21次調査は、祭祀溝と甕棺墓の分布から区画を想定したものである（山口1992）。この溝が区画墓を囲むものであるなら長軸33m、短軸22m程度の規模に復元できる。



第47図 区画臺の変遷（縮尺1/800）

IV期は三雲南小路と須玖岡本の厚葬墓の段階である。須玖岡本の墳丘墓はD地点の西側に位置する。墳丘をもち、長軸25m、短軸18m程度の規模になる。須玖岡本と比恵遺跡6次調査の区画墓の復元がほぼ同じ規模であるのは区画墓の企画性を考えるうえで注目される。

早良平野をモデルケースとした墓制

早良平野は東西を丘陵に挟まれた扇形の範囲で北側は博多湾に面している。市街地の開発や郊外の基盤整備事業によって平野主要部の墓地の様相が把握されていることから、墓制の分析に適した条件をそなえている。

吉武高木遺跡は、アミをかけた範囲内に墳丘状の高まりがあったかどうかは不明だが、個々の墓地に標石などの施設があったことは隣接する墓坑どうしが切り合っていないことからも明らかである。I期段階までは壇棺墓と木棺墓が並置されており、木棺は組合せ式と棺底が削竹形の構造の2種が確認されている。

III期に造営された吉武櫛渡遺跡の区画墓は、3m程度の墳丘に個々の墓坑を掘り込んだもので、青銅器から鉄器へ移行する段階の副葬遺物を分散保有している。

- A吉武高木遺跡・・・個々の墓地に標石などの施設があったことは隣接する墓地どうしが切り合っていないことからも明らかである。列墓の分布形態をとる区画墓といえよう。青銅器および装身具類が集中するI期の墓群は他に類を見ない。
- B吉武大石遺跡・・・吉武高木遺跡の北に位置する列墓。個々の墓地構造は吉武高木にくらべて規模は小さい。石剣先端部の出土数が目立っている。吉武高木遺跡とほぼ同数の青銅利器を保有するが、装身具が確認されたのはI基にとどまる。
- C吉武櫛渡遺跡・・・墳丘をもつ区画墓にIII~IV期の20基ほどの壇葬施設がかかる。青銅器や鉄器類を分散所有する。IV期の壇棺に小型の漢式鏡を副葬する。
- D東入部遺跡2次・・・I期段階から100基あまりからなる列墓を形成し木棺墓と壇棺墓各1基に細形銅劍を副葬する。III・IV期になると列墓の南北にそれぞれ区画墓が形成される。北側の区画墓内は鉄器を副葬する系列墓4基を含むが、南側の区画墓に副葬遺物はみられない(濱石2001)。
- E浦江遺跡5次・・・III期段階に築造された区画墓。26基の壇棺墓の多くは共通の方向性で整然と配されており、南東部に陸橋をもつ。およそ4群にグルーピングできる系列墓であろう。金属器などの副葬遺物は保有しない。
- F野方久保遺跡2次・・・II期の壇棺墓2基から銅劍が出土した。5号壇棺には把頭飾がともなう。城ノ越式期の様相を示す稀少な事例である(第48図)。

浦江遺跡5次のK-13は大型の壇を組み合せたもので、墓坑の底のレベルが低いこと、壇棺の型式として古相を呈していることなどの理由から、区画墓は、K-13の埋葬を契機として企画されたと考えられる。このほかK-13の主軸方向と東辺が平行で南辺と直行する関係にあること、青銅器など宝器を出土する壇棺墓の組合せはIII期までは大型壇のセットがほとんどであることも要素として忘れてはならない。集団墓のなかでハイレベルといえる13号壇棺墓の被葬者の性格を示すものである。13号の東に位置するK-11は墓坑の底のレベルが低く、下壇の挿入方向は異なるが主軸方向は近い。13号の被葬者との緊密な関係性がうかがえる。

浦江5次の区画墓内の墓群は、集団間の詳細な区分は微妙なものもあるが基本的には中央トレンチ

をはさんで東西南北の4群に区分できる。各群は、主軸方向に統一的秩序をもった系列墓として捉えることができる。

早良平野の湾岸部の砂丘上には藤崎・西新町遺跡のような300基を超える墓群が形成される。これらすべての墓群を集団墓として包括するには集落域の実態解明がすんでいない。墓群の分析に共同墓地的な視点を加えて検討することを提案したい。

砂丘の後背地の低丘陵や段丘に分布する野方久保、飯倉唐木、有田の各遺跡では中期前葉までは銅劍や劍戈が単発的に副葬される。劍劍をはじめとする青銅利器に、その希少性から宝器としての価値観が付加され、その有無によって水系や拠点集落さらには平野間における集団の優位性が論じられてきた。Ⅰ・Ⅱ期の段階には青銅利器を媒体とするネットワーク論が浸透している。

Ⅲ期以降になると剣り方部分の幅が広く細形の範疇に入らない異形の銅劍が、吉武櫛渡遺跡だけで確認されている。Ⅳ期にかけて吉武櫛渡では銅劍にかわって副葬遺物は鉄器へ転換する。だがⅡ期古段階の野方久保遺跡5号櫛棺の銅劍と把頭飾は、Ⅲ期の吉武櫛渡遺跡75号櫛棺の銅劍と把頭飾と型式的に類似している。相違点は吉武櫛渡例の剣り方がわずかに長いとの関部の端部が突出して研ぎ出されている点だけである。脊まで研ぎ出した全長35cmをこえる銅劍がⅡ期古段階の櫛棺に副葬されていることは国産青銅器の変容を考えるうえで無視できない所見である(第48・49図)。

中期全体でいえば、墓群によっては副葬遺物が欠落する段階が認められるわけで、青銅器や装身具の有無だけでは見通せない部分があるのは確かなようである。今回の区画墓の調査は、墓地構造から墓制や葬制を理解するうえで検討素材を提供できたと考えている。区画を有しない墓群との比較を当面の課題として結びとする。

早良平野における墓制の概要は以上だが、Ⅳ期でも中細形銅劍の副葬が継続された地域がある。それは早良の東西に位置する奴国城と伊都国城の厚葬墓である。

引用・参考文献

- F藤尾慎一郎1989「九州の要棺—弥生時代要棺墓の分布とその変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第21集、国立歴史民俗博物館
- 福島日出海1997「原田・銀田原遺跡」「嘉穂町文化財調査報告書」第18集、嘉穂町教育委員会
- H濱石哲也(編)2001「入部X」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第685集、福岡市教育委員会
- 橋口達也1992「弥生時代の戦い—武器の折損・研ぎ直しー」「九州歴史資料館研究論集」17、九州歴史資料館
- 速水信也1985「横隈孤塚遺跡II」「小郡市文化財調査報告書」第27集、小郡市教育委員会
- K鏡山猛1939「我が古代社会における要棺墓」「史源」第21集、九大史学会
- 加藤良彦・大塚紀宣1999「窓見が丘」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第614集、福岡市教育委員会
- M溝口孝司1998「カメ棺墓地の移り変わり」「原生人のタイムカプセル」福岡市博物館
- 森貞次郎1968「弥生時代における細形銅劍の流入について」「日本民族と南方文化」金間丈夫博士古稀記念委員会
- N中山平次郎1917銅鉗銅劍の新資料」「考古学雑誌」第7巻第7号、考古学会
- O岡部裕俊1999「王墓の出現と要棺」「考古学ジャーナル」第451号、ニューサイエンス社
- S佐藤正義1997「大木遺跡」「夜須町文化財調査報告書」第35集、夜須町教育委員会
- 七田忠昭1997「吉野ヶ里遺跡」「佐賀県文化財調査報告書」第132集、佐賀県教育委員会
- T常松幹雄2002「銅劍からみた弥生時代の墓制と葬制」「細形銅劍文化の諸問題」九州考古学会・椎南考古学会
- Y山口雅治(編)1992「那珂5」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第291集、福岡市教育委員会
- 柳田康雄(編)2003「伯父社遺跡」「春日市文化財調査報告書」第35集、春日市教育委員会
- 横山邦耀1983「比恵遺跡—第16次調査・遺稿編一」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第94集、福岡市教育委員会
- 横山邦耀・力武卓治(編)1996「吉武遺跡群四」「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第481集、福岡市教育委員会
- 吉留秀敏1988「比恵遺跡群の弥生時代墳丘墓」「九州考古学」63号、九州考古学会

Report on a Jar Burial Site of the Middle Yayoi Period in Urae Sites

The burial Jars have wide distributions in northern Kyusyu in the Yayoi period. Up to now, more than 25,000 burial jars have been found. This document is a report of a cemetery, excavated in Urae(浦江)site in 2002.

This site is situated in the Sawara plain(早良平野),west-side of Fukuoka City, and located on the river terrace near the middle reaches of Muromi (室見川) River and about 40 meters above the sea.

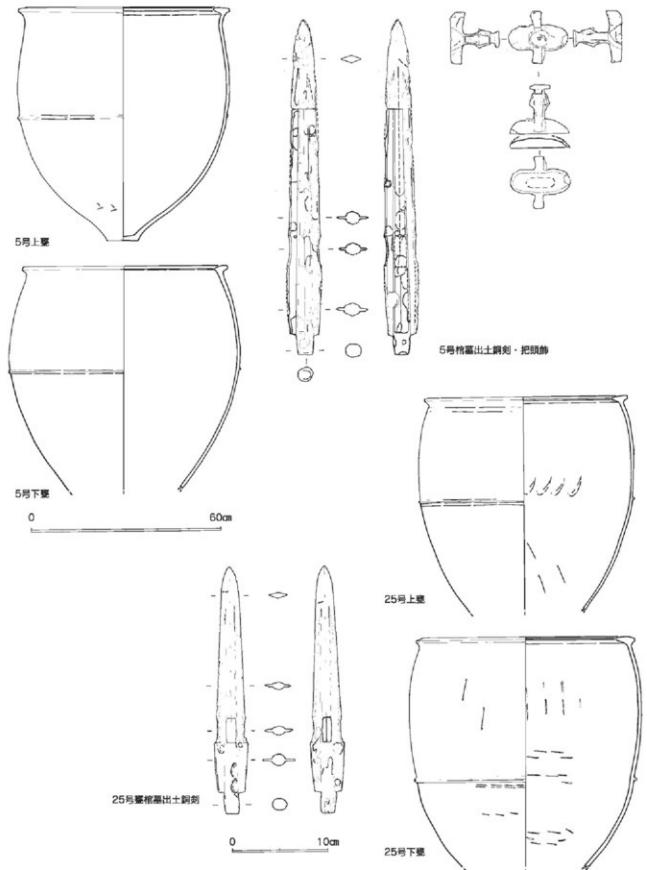
Though the north-side of cemetery was encroached by a valley, it still consisted of 28 burial jars. The types of burial jars are dated to latter half of Middle Yayoi period (c. 1st century B.C. - 1st century A.D.). The jar burials were surrounded by a kind of moat, and a passage was connected at the southwest corner of the burial precinct. As we regarded a dead person of burial jar no.13 as like a dominant person by the position and structure of burial precinct, we attempted to restore the cemetery to its original condition. The scale of the burial precinct is a mound 13 by 21 meters. While the surface of burial mound was planed by cultivation, original level of the mound is thought to be about one meter higher at least.

Since cemetery consists of several sequences of burials, many burials were situated north and south, so the directions of the burials were almost common. In and around the burials, we could not find offerings including accessories, and have no data about characteristic form and quality of dead persons. Just a bit of cinnabar was found in burial jar no.13.

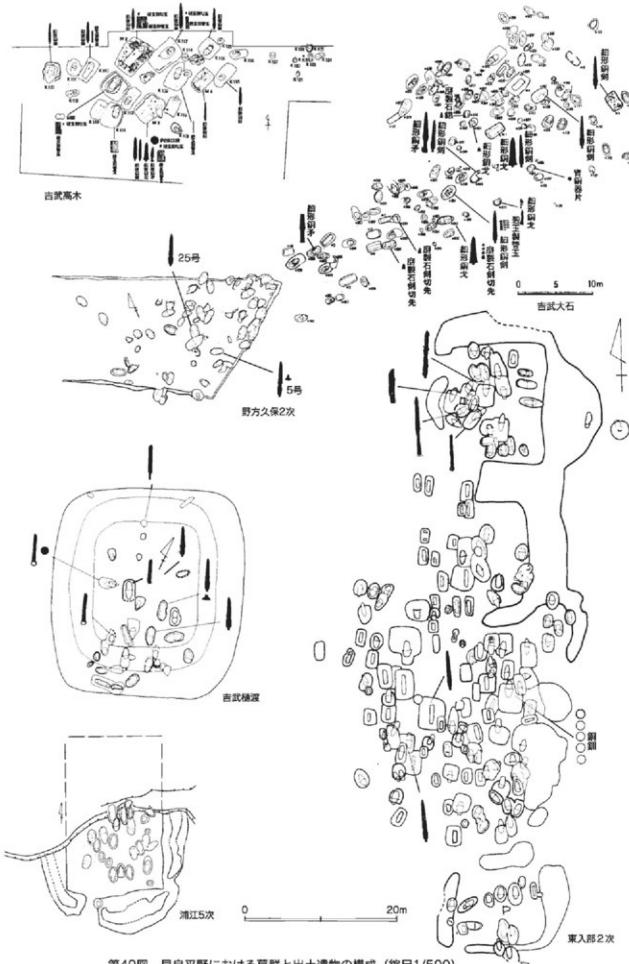
There were no burials around the southwest corner of the precinct, so the space might be used as mortuary ceremony. Most potteries were found from south and east side moat. Main vessel shapes are jar with wide mouth, pedestal, bowls with tall foot. They are painted by red oxide of iron.

However many cemetery has been excavated in Sawara plain, such a case as jar burials were surrounded by moat is very rare. Now we cannot clearly interpret a character of agglomerated jar burials separated by moat, various problems to be solved are still left. We hope this report contributes to studying social relationships in prehistoric Japan. At the end of this report, we appreciate advises and aids by many organizations and persons.

Key words: the Middle Yayoi period; jar burial; burial precinct; Northern Kyusyu.



第48図 野方久保遺跡2次調査出土の青銅器と墓棺 (縮尺1/4・1/12)



第49図 早良平野における墓群と出土遺物の構成 (縮尺1/500)

図 版

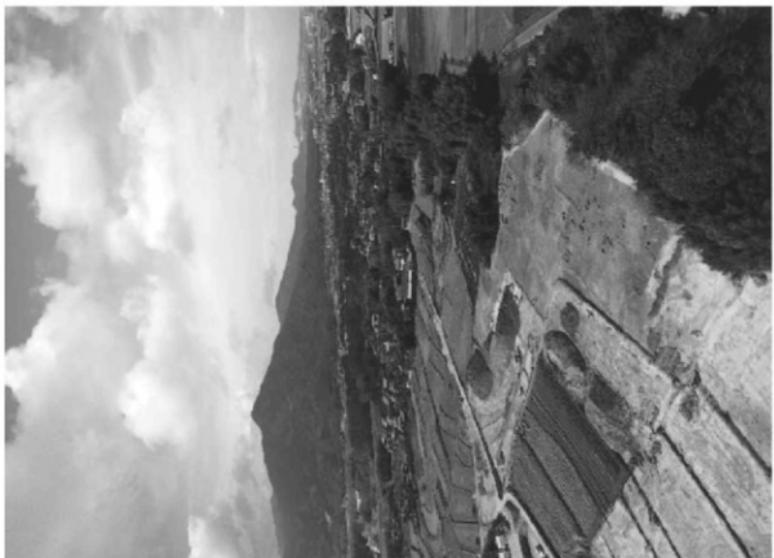


区画墓全景(真上より)

図版 1



区画整備調査区全景(南西より)右手は室見川



区画整備調査区全景(南東より)左手は板壁山

図版2



区画墓周辺調査区全景(真上より)



区画墓周辺調査区全景(北より)

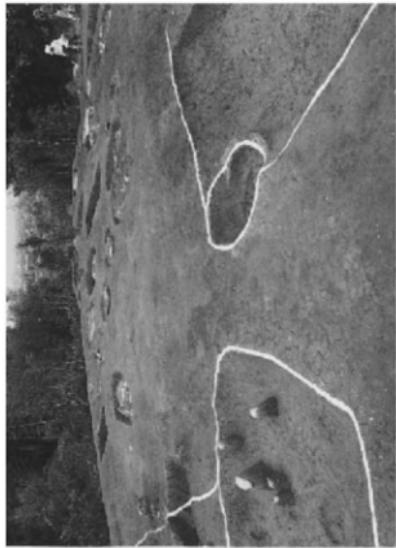


区画墓全景(西より)



区画墓全景(南より)

図版4



1.区画墓西端全景(南より)

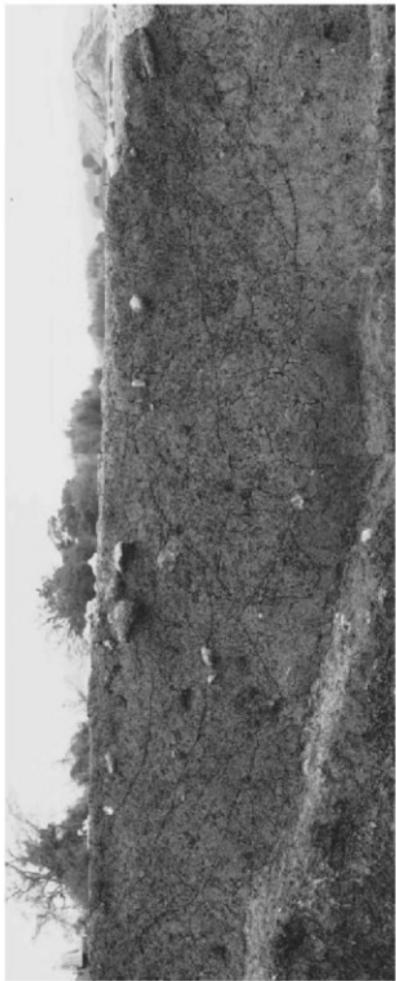


3.区画墓東端遺物出土状況(南より)



2.区画墓西端(南より)

4.区画墓東端遺物出土状況(西より)



1. 区画墓西溝土層北壁断面(北岸側より)



2. 区画墓東溝土層北壁断面(北より)

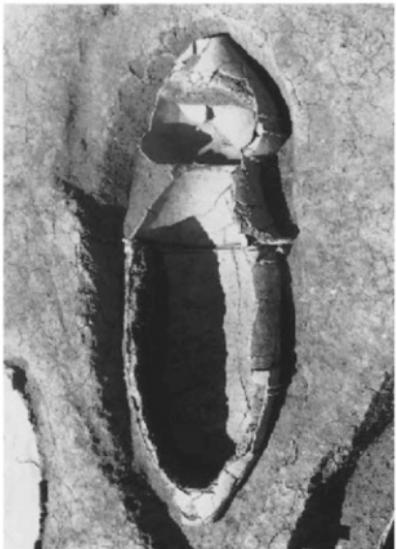


3. 区画墓東溝遺物出土状況(北より)

図版6



1号墓柏原（東より）



2号墓柏原（東より）



4号墓柏原（西より）



5号墓柏原（東より）



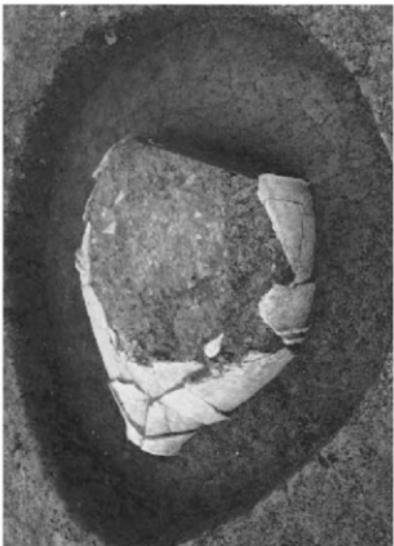
6号墓棺蓋(東より)



7号墓棺蓋(南東より)



8号墓棺蓋(北より)



9号墓棺蓋(東より)

図版8



10号壺棺墓(東より)



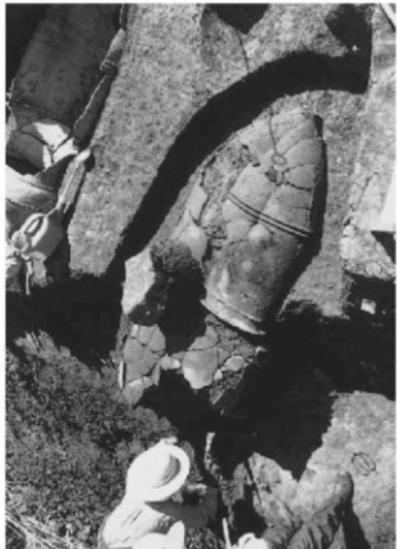
11号壺棺墓(南より)



12号壺棺墓(西より)



14号壺棺墓(北より)



13号墓棺墓検出作業風景(西より)



13号墓棺墓(西より)



13号墓棺墓(南より)



13号墓棺墓完掘状況(南より)

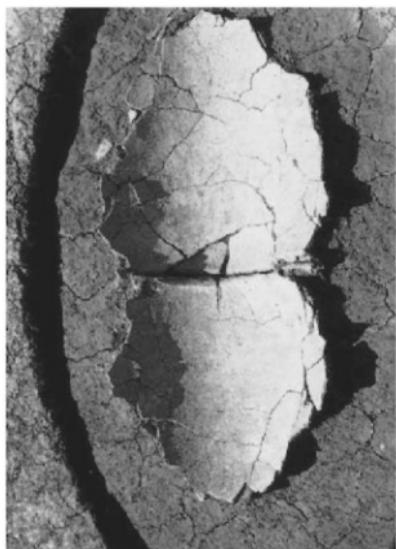
図版10



15号墓棺蓋(東上り)



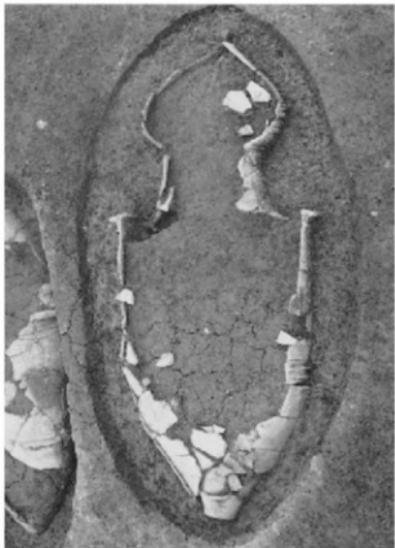
16号墓棺蓋(西上り)



17号墓棺蓋(東上り)



18号墓棺蓋(東上り)



19号墓
（西より）



21号墓
（東より）



22号墓
（東より）



23号墓
（北より）

图版12



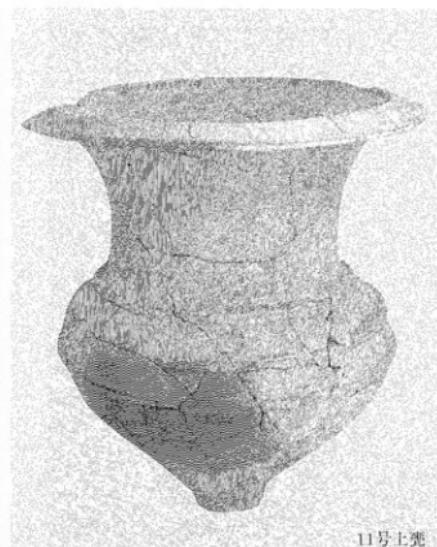
24号茎部器 (内よし)



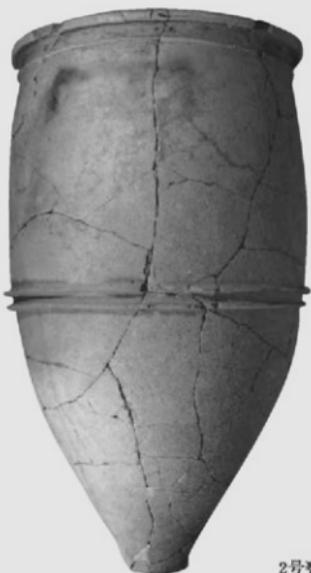
26号茎部器 (北東上)



6号上部



11号上部

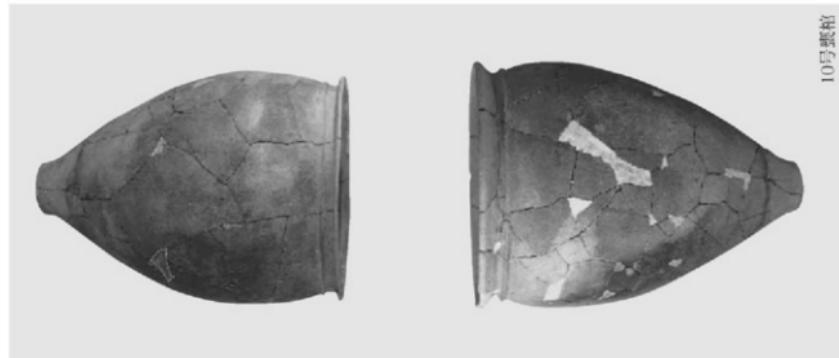


2号麦棺

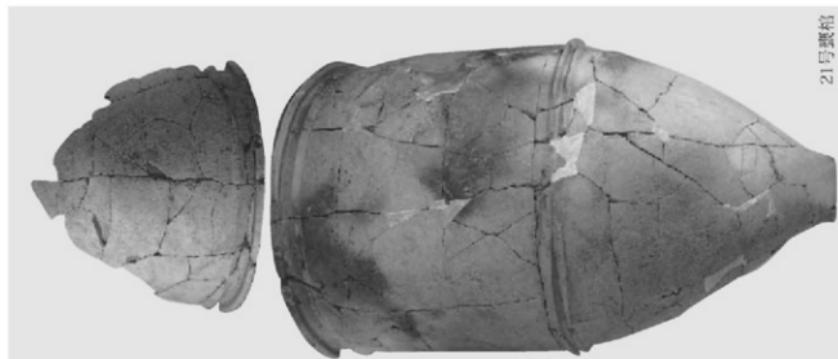


13号麦棺

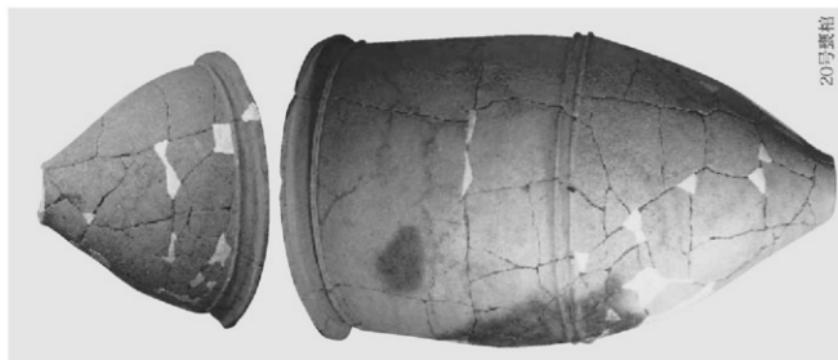
図版14



10号櫛棺



21号櫛棺



20号櫛棺



9号甕棺



19号甕棺

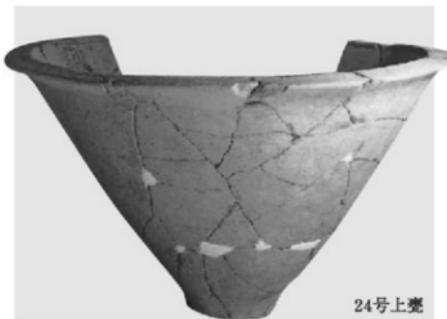


16号下甕

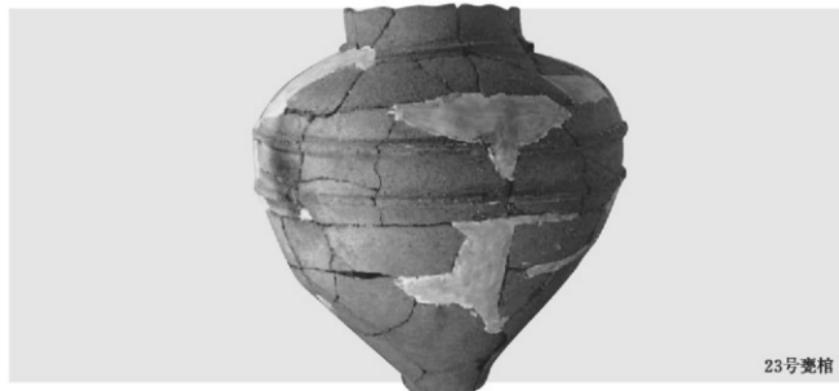
圖版16



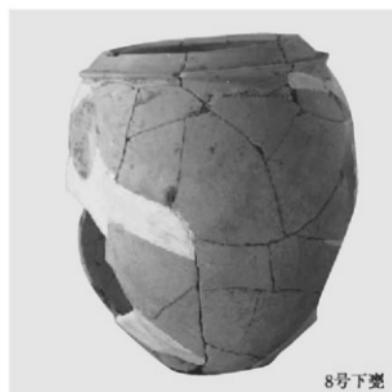
1号上壳



24号上壳



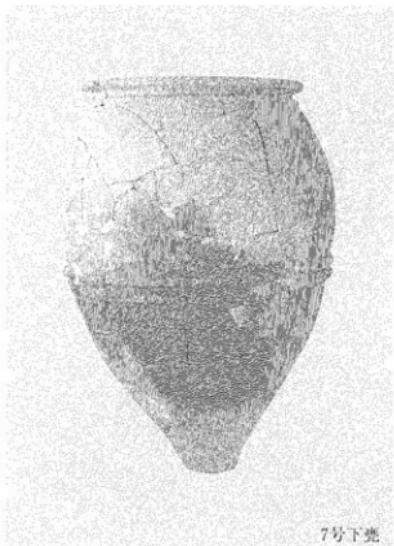
23号壳棺



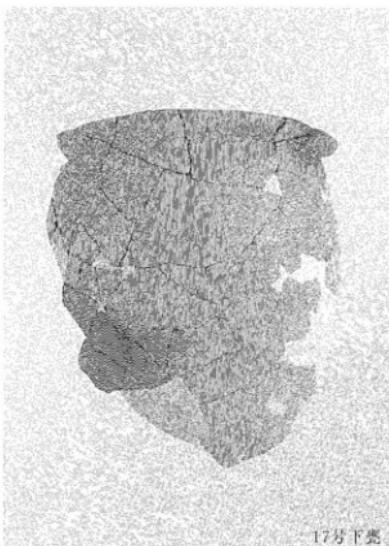
8号下壳



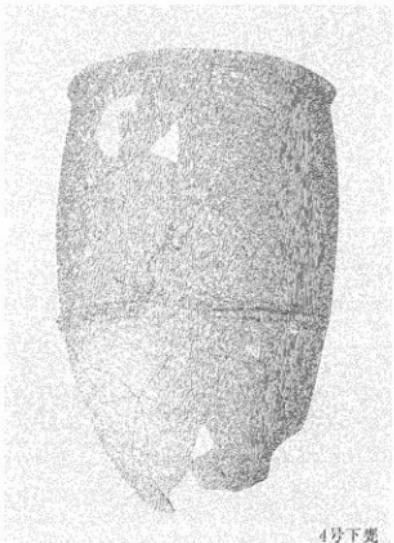
18号中壳



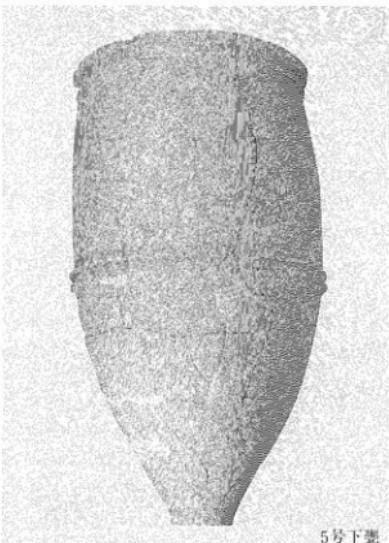
7号下壳



17号下壳

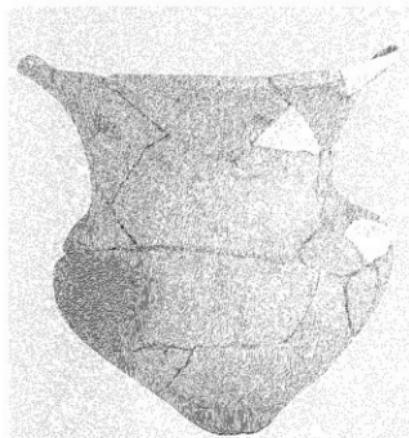
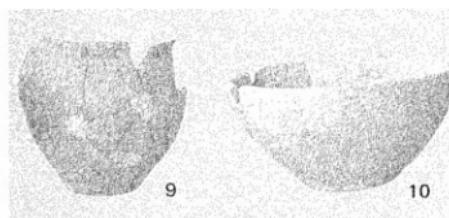
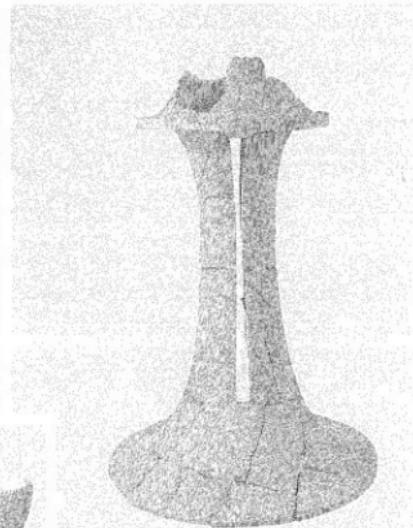


4号下壳



5号下壳

図版18



区画溝出土の土器

報告書抄録

ふりがな	うらえいせき								
書名	浦江遺跡 第5次調査 2								
副書名	斂棺墓地区の内容確認調査報告								
巻次									
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ名番号	第863集								
編著者名	常松 幹雄・吉武 学								
編集機関	福岡市教育委員会								
所在地	〒810-8821 福岡市中央区天神1丁目8番1号								
発行年月日	2005年3月31日								
収蔵遺跡名	所在地	コード 市町村(遺跡番号)	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
浦江遺跡第5次 調査斂棺墓地区	福岡市西区 大字金武字 山田の上	40134	33° 31' 15"	130° 19' 19"	20020110 ~ 20020825	500m ²	重要遺構 確認		
浦江遺跡第2次 調査斂棺墓地区	福岡市西区 大字金武字 山田の上	40134	33° 31' 15"	130° 19' 19"	19911106	5m ²	自然崩壊		
収蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項			
浦江遺跡第5次 調査斂棺墓地区	墓地	弥生時代	斂棺墓・区画溝	斂棺・弥生土器	墳丘をもつ 区画墓				
浦江遺跡第2次 調査斂棺墓地区	墓地	弥生時代	斂棺墓2基	斂棺					

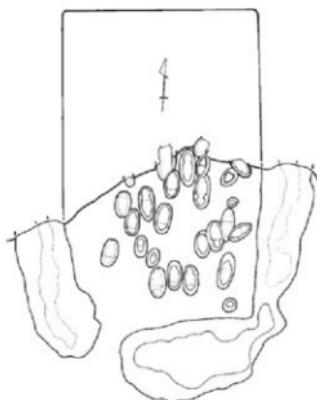
浦江遺跡第5次調査 2
福岡市埋蔵文化財調査報告書第863集
2005年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 常松影堂印刷株式会社
福岡市博多区吉塚5丁目13番40号

Jar Burials in URAE Sites

Result of the fifth excavation

Report on Archaeological Research in Fukuoka City vol.863



2005

The Board of Education of FUKUOKA CITY
Japan